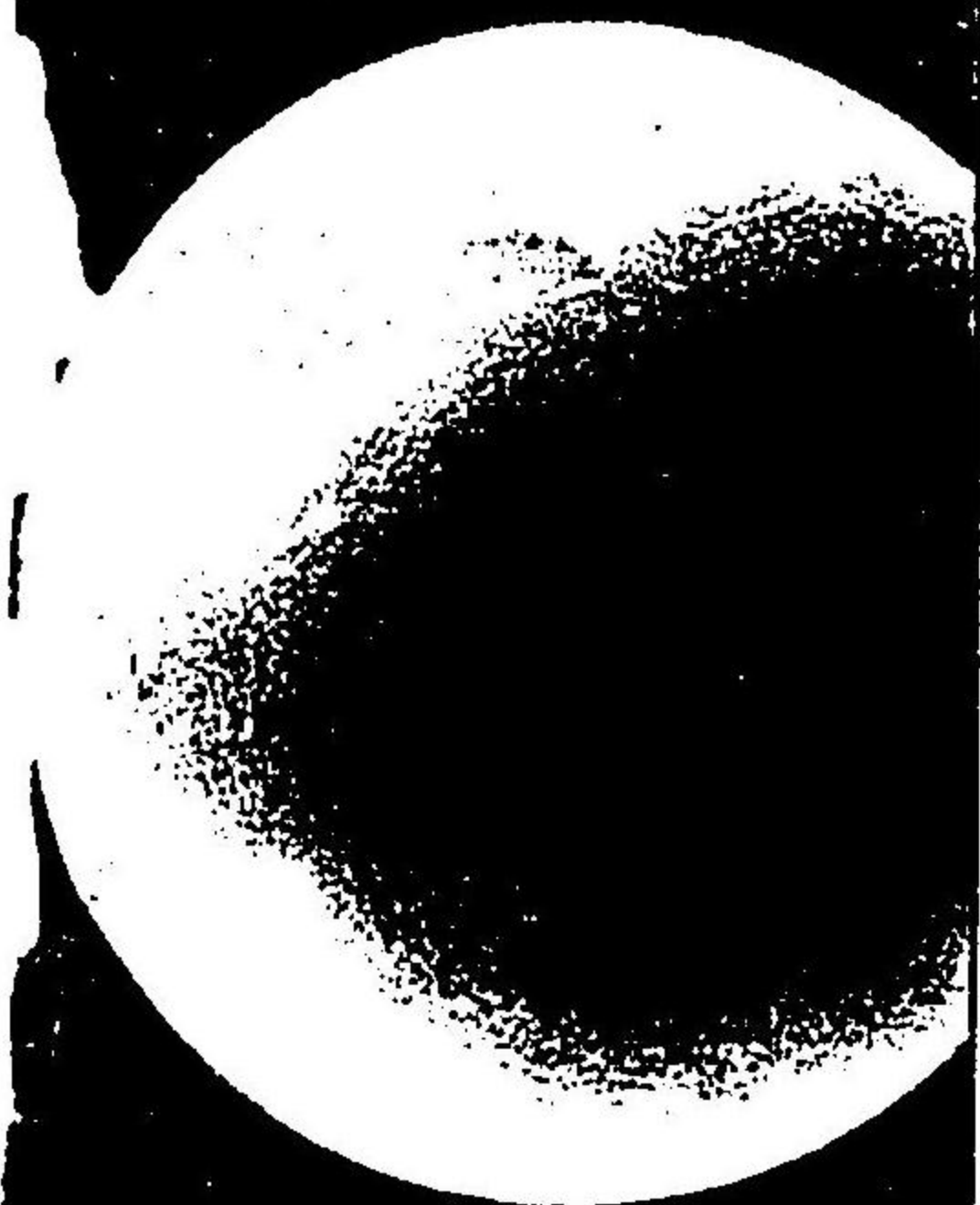


特 9

310

檜山麿齋

邑并吉嶺漢演
今村次郎速記



講談百種發行の趣意

近年世より小説の流行を極めたる時に當り、雖彼となく皆な小説の素作に心を委ね、即ち又た其の出版を相競ふたりされども、只だ一時の流行をあせりて、良も悪きも出版さへすれば賣るといふ有様なり。實に可借良材も力なき人の筆を掛りて、花も實もなき根無し草となり、厚紙の片隅に些少の價の正札附となりし、書物も多く是等の種類は固より文章共に拙なく人をして感憤を惹起すに足らず。凡そ小説をして能く喜怒哀樂奮興の情を感起せしめ、恰も其の狀体を目前に見るが如く思けしむるの講談速記は如くあらじ。然れ共、此等並言若くは片言等のあるハ口舌の儘なるも依て是を免かれずと雖も、面白くして解り易きは文章に能く綴り得ざるの妙あり。因て本館は茲に都下有名の講談師が各々得意とする新古講談中、最も世の好評あるもの百種を撰み、号を重ねて陸續發するの計書を起したり。而して其の講談は悉く世に有るの物と同一の類ひに非ざれば、若客是より依りて初めて能の正しきを知り玉ふべし。

310



九十四百二

榎山麒麟之一聲下編

第十一回



今 邑井吉瓶講演
村次郎速記

者凡そ五十余人なれども勇壯活潑の三次多勢に屈する氣色もな
 集まりし者か六百余人三次は何様突然の事ゆゑ近傍に折合す
 何をいふにも梁川は従來の親分も大凡四五百人多勢を頼み
 川原へ出張なし有無存亡の勝敗を決せんといふ勇ましき意氣組
 些細の事より同郷梁川直右衛門と互いに見習ふ者か此度圖らず
 針ま引かるゝ糸といふて自づから之を見習ふ者か此度圖らず
 手は是れ矢也素より無教育の博徒伊達の三次放蕩無頼の渡世な
 能く義を重んじ弱きを助け強きを挫くされば其の部下の者
 備次を遣ふて上ます麒麟の一聲言葉も剛毅朴訥の仁に違ふ君

土水聯洞の歸谷師續いて蘇秦張儀吳氏孫氏張良韓信近く孔明
 周論又た日本では源の義家伊豫守義經近くは河内の楠公真田親
 子、是等の皆謀書を私が臆んじて居る、此の學問の力で、御助力を致
 さう、子分は口を揃へて「宗匠申戯いつちやア往ませんや、河原へ
 往つて議論をしやうといふンぢやア無へや、殺すか死ぬかの勝負
 をするんです、學問も蜂の頭も入つたもんぢやアねへんです、大イ
 ヤサ併し然う仰しやるが、小さくいへば喧嘩だが大きく取れば戦
 争で、ないか、今親分の御言葉にも此の首を渡して我が場所を敵
 よ取られるか、彼奴の首を取て梁川の支配を占領するか、有無存亡
 の勝負と仰しやる、さすれば大小の論は置て是れ戦争、身分に取れ
 ば天下分目と仰しやる、然るべし、其の戦争と見做して私ハ軍師を
 めやう、又た一同は口を揃へて「子イヤサ宗匠夫はね、博奕打の喧嘩
 なんて、エものは早エ處が劍術使ひか第一役に立たねへ、聖劍の先

し進んで敵を破らんといふ言葉に就て子分の者も敵の多勢は有
 難ニ、喧嘩は小勢でなけりやア勝てねへ、サア此の喧嘩ハ億ハ勝た
 と勇み誇つて居る處へ前や上たる俳諧師の寐惚庵座敷より
 ノッソリと出で來り大「どうも親分さんだ御心配な三「エーモ、博
 奕打は仕方が多座んせん年中此ンな事をして暮すんですよ、直に
 岸ア附ませうから貴郎妙見寺へでも往て少はし遊んで居て下せ
 エ大「イエ一問で聞た皆さんの決心親分の覺悟波世柄とはいひな
 がら誠に感服しましたよ、夫に皆さんの仰しやるのに敵の大勢が
 何よりだ小勢でなければ喧嘩は勝てんと仰しやるのは剛いね
 へ、私も永らく此うして居厄介になつて傍觀をして居られませ
 んト云つて皆さんと同じやうに竹槍手槍を引提げて先へ進む氣
 力はなない併し私は幼年から軍書が嗜で和漢の書物を能く讀んで
 居ます、依て此の軍事の策略書は腹メ納めてあるよ、ア遠くハ唐

先刻よりの問答を聞て居た三次が笑ひながら三蔵程宗匠のいふ通り、小さく取りやア間違ニ大ききいやア全たく取争、軍師を仰しやるのハ面白、學問の力でやつてお呉んなせエまし大ニ親分さへ伊承知なれば宜しう伊座い升子「マガチ親分、俳諧師よ軍師たつて夫アどうも覺東ねへ話ぢやア伊座いませんか三イヤサ俳諧師といふな、學問の力でしやうと云いなさるのだ、乃公が任したら不思議ア無へぢやア無へか子「夫ア親分が任せるると仰しやれば夫までだが、マガ宗匠どういふ計略で喧嘩をしやうといふのだ、大「夫ア往ない、此ういふ計略だと大勢の面前で嗜舌るやうな事で計畧にならうか勝つ事ハ千里の外謀畧は帷幕の内敵を計るよは第一味方を計るのだ我が謀畧は方寸の内よ置て大將の親分初め部下の皆さんも知らざればこそ敵へ洩さす、那方で聞て居たら忍を入ると頻りよ仰しやる向ふへ忍を入れて様子を探る、向

生だ、目錄だ、免許だアと肩書が附て居て出れば叱度やられる、いふのは先生達の方ぢやア自身「といつて敵の尖先より自分の身体が第一こわい、夫ぢやア喧嘩は出来せんや、私共は素よ何にも知らねへ持てる刃物と命と二ツ、身体は素より投いだし、敵に皮を切らして肉を切れ、又た肉を切らして骨を切れ、腕を落さして首を落せといふのは博奕打の喧嘩の流儀です、夫だから場所へ出りやア無事で歸つて来た時よやア、生れ代つて来たかといふ位の者でげす軍師も糸瓜も入りません夫アお前さんが其所其處の子分で昨日盃を賞つた三下でも同業ならば兎も角もお前さんの俳諧師だ俺共が見りやア失禮ながら藝人同様だからア親分の云ふ通り寺へ往てなすつた方が宜う伊座エませう大「然う皆さんのやうに表面の一方をいつて居ては又た往んよ、コリヤ親分よ相談どうで伊座い升、親分學問の力で軍師を勤めやうといふのを

勢を運れぬよく御不動記で見ると本多忠勝が戦地へ出兵の折は其の勢ハ五百人何處の軍にも忠勝公は五百の上を運れず具田親子
が北條の軍を破つた其の勢はいくらは是れ又た五百に足らん正
成公は北條も向ふも三百か四百又た足利高氏叛旗を翻へし此の
大軍を破るも千騎も足らず各々其の軍法の賢とい人は大軍を都
魔といふ小勢だから勝つといふのは其處だ是れが味方必勝の根
としませう是れ就て施す策けれや百戦百勝は善の善ならずしむ
ると兵書にあり敵を多く殺すが勝でないから敵も殺さず味方は
猶さすれば此の軍此の名義は討たず討たれず逃す進まずといふ
べきださう皆さん考へて居て下さひ三次は威服致すも其他の
者は子講釋は大層巧手なやうだけれやつて見にやア何んな者
だらうかなア宜う御座エすかね親分三まだ然んな事をいつてや
るか先生のいひなすつた事か分らぬへか子夫ア分つてます三分

ふからも此方へ其の忍を用ゆるもの其の謀計を一々敵へ知らせ
る位なら謀略は入らぬ事決して我が口外は我さんもの夫が取
の得意です子何だか能書は大層だけれどもさうも不安心の軍
だなア大不安心と仰しやるならば只だ此の喧嘩に勝つといふ
味を陳ませう能く勝負し勝つては只だ時の運といふ此ア我々
云はせる大きな間違ひ時よ任せ運に任せ無鉄砲な事をした日
よは中るといふの百中の一二夫ハ捨鉢と俗にいふ奴隷野人
のいふ事取るに足らんといふべきぢやな何處までも勝何うし
ても負んといふ必勝の理をすくつて事をせんければ往ん只だ私
の見込ハ親分初め皆さんの言葉に敵を探れば六百余名味方ハ些
か五十何人敵の大軍ハ面白味方の小勢は何よりだ小勢でなけ
れば喧嘩は勝てないといふ仰しやつたが此の精神たるや我が兵法
極意試しみに考へなさいまし昔から軍の巧手な勇士極めて多

を見廻し甲「サア、敵が来た、何處から押初めるんだ、軍師は何處へ行た軍師の、乙「軍師は居ねへ、甲「軍師は居ねへ、乙「居ねへ、甲「軍師は何處かへ往ちまやがったな、高慢の事をいやアがつて風呂敷を廣げやがったがな、向ふの多勢を見やかつて、ろきやアかつたんだ、軍師があつちやア往ねへ、無へ方が宜い、大作は小高い處から敵味方の様子を探めて居た、多勢ながら敵は狼狽、小勢といへば味方の緒りは確かな様子、先づ是でよしと内々で盤詰の平吉を呼び桑折の町へ遣はしたは流言の策、さて其の後、は此うして那アしてと平吉だけへは其の用向を純と吩咐け、ノッソリ河原へ下りて来て大「ヤア皆さん御苦勞さま、甲「ヤア軍師が来た、乙「乙「軍師が来た、甲「カム来た乙「ヤア、まづい支度だ、なアさうも、軍師が受取れねへなア、私法標の石籠を賣るやう

つたなら夫で宜い、サア支度をしろ、と各々身支度、門出を祝ふ、末期の盃是にて尙々勇氣も彌増し、各々種物を、を押し取り引提げ、越旗を押し立て、トッとはかり、押し出したす、處は名に、おふ阿武隈川原、五月十四日は朝まだき、妙見山を後ろになし、大河を前に、濃取た伊達の三次が五十余人、遙かに向岸を見渡せば、未だ火の手もあらざれば、敵より先へ来たは何より、ソレ等火、と下知を爲す、敵ヶ所へ積上げ、焚立たる篝の火、川水へ映るはいと物凄く、殊更に降み降み、五月雨の、打積いたる事なりせば、川水の馬み渡を、洲枕高く押流す、其の水勢の烈しきは、矢を射る如く、トッとして上たる、其の聲、響き渡り、四邊をふるふ有様なり、兎角の中、後れ走せ、向岸へ出張ありし、梁川方、ソレ出後れたか、残念と、同じ、籌りを焚立て、規則も届かばこそ、己がまよ、叱鳴るばかり、三次の子分は、邊り

な扮装だなる、大作は又た妙な支度、中形真岡の軍物に、千尋の道
 行振、白の股引も鼠色、茶木綿の合切袋、汗な厚材齒の下駄を履き
 大ニ一軍師は此ういふ扮装でなければ往なハサア勇氣を落して
 は往ないよ、モツと吡の聲を勇ましく掲げて、併し皆さん経馬のも
 のだア一能く則が立て居舛恐れ入つた、是のらが軍師の役、モツと
 離れて吡を掲げて下さい、火を運ばぬやうに去てモ一十五六ヶ所
 箒火を殖やして下さい、梁川方は不規則ゆえ箒火は焚けど場所
 定まらん桑折は小勢といへど其の則の正しき爲に箒りの場所も
 法よ叶ひ、何うやら勇氣壯んな様子、向岸より見る柳川の者共は忍
 の知らせは小勢といへどアノ様子では小勢處か何千人だか別ら
 ぬと大きに之を怪む者が多いゆえ、自然と勇氣も衰へ勝ち、此方ハ
 大作夜が明ては一大事と渡船所へ來り、多分の銀をやつて向岸へ
 渡り、河原傳ひに梁川方、箒火の前まで來りし折子「何だくくく」

何でエ大ニ一私しは伊達の三次の使の者では盛い丹無川の親分
 さんにや上る事があつて参りましたやうかお遇いを願ひ丹子「持
 てく」親分敵方から使が來やした親分にお目を見やりてエエサ
 ますが何うしますエ直敵の使に遇はなけりやア卑怯だ、ナア此方
 へ通せ子此方へ通つた：待た待ては人の子分左右から「ヤ」
 する手槍を突附け直右衛門の前へ案内する、大作はグッ／＼笑い
 ながら何だ此奴等ア乃公一人よ然んなよ七人も八人も槍を列べ
 て何で槍を持って振へて居やがる、持て居る槍が怖いんだらう然ん
 なものを持って來なけれア宜いのよ馬鹿な奴だ、多勢の中を見れば
 何れも色を失ない胴振い、ア一意句地のない奴等だ、此奴らア、叩
 き合つたら一ツたゝさだらう、此アと思いながら合切袋を川原へ
 投げ置き直右衛門の前へ手を仕て直右衛門は恐ろしい支度、真綿
 の這入た胴服をピッ／＼と濡らして其上へ七寶襦袢の着込み

せうか御返答を伺い度う伊座い升直右衛門は考へて居たが直成程桑折の市日だから待て呉れろと云はれりやア此ア與法、梁川の市日だから待てといはれりやア伊座尤です云いなさる通り我々は覺悟の上、百姓衆商人衆と疎組があつては大きに濟ねへ、夫も日延といはれちやア是ア出来ねへ、女房子へ水盃をして出張なした我々だ刻限といはれちやア仕方が伊座へません仰しやる通り七ツ時まで扣へませう、夫は有難う伊座い升、嚙三次も喜こぶ伊座いませう、使に立た私しも満足致ま升直併し此方さんは三次さんの伊身内かへ大イ、エ私しは江戸表の俳諧師寐惚庵夢中とす者で伊座さい升直ハア然うかねへと胆の座つた様子に呆れ暫らく顔を眺めて居た直併し伊使は伊苦勞様でした夫ぢやア妙見寺の七ツの鐘が生死の堺再び使ひにやア及ばねへ、三次さんを初め皆の衆首を洗つて出て呉れと能う云つて呉んなされ大へエ承知

其の上へ威しの腹巻、美濃紙を七八十枚、是も濡らしてスツボリ冠り、其の上から鎖鍛の鉢鍔頭巾二尺五六寸の長刀を横たへて、一尺四五寸の脇差右手に合口、六尺柄の手槍、一人で此んなす使へるものか、樽へ腰をかけて、名におふ五月の十四日中々曇い、迂鳴て居る直三次さんの使口上ハ何だエ大へエ、エー三次のやまするは御約束通り御出張も相成ましたは、伊苦勞に存じまする夜明次第、有無存亡の勝敗を決すべきでは伊座います考へました處、四九は梁川の市日、モ、彼是れ商人衆百姓衆も出盛りませう、我々は深紙を負ふて其の場も倒れるも覺悟の上では御座いまするが堅氣の衆に怪俄過ちのある時は其の方々へも濟す第一お上へ恐れ入る、依て正午後八ッまでは市が引ひませう、日の長い今日、正七ッ時から繰り勝敗も決せられませう、七ッ時まで伊休息を下され度う伊座います伊聞入れなければ強ては伊願いすません如何で伊座いま

致しました：エー皆さん、昔、苦勞で伊達に升、と河原へ置たる合、切袋を左りへ提げて出て来れば、又もや前の八人子待て、待た同じく手槍を突付けて相馬の跡より送り出したす、隠病者が何をまやアがる、とゲラ、笑いな、がら河原傳ひに元の越場此方の岸へ着く頃、は早や明け安き五月の夜日のさし登る頃、にやなるヤア軍師が歸つて来た、サアモ、宜い、ハヤ親分直右衛門といふ人の結拵人だね、ハ勝た、サアモ、宜い、ハヤ親分直右衛門といふ人の結拵人だね、エ、那ア、善い人で、すよ、王敵の大將ばかり、貧めてちやア往ね、サア出掛るのか、ハ、大、サアニモ、喧嘩は勝た、んだ、モ、濟んだ、子、申、戯、いつちやア往ね、何處で喧嘩をして何方が勝た、んだ、大、何でも、彼でも勝た、んだ、から、仔細はない、サア親分、モ、支度を直しなすつて、其の槍や鉄砲を片付けて、三、次は直襟衣類を着換へ、單物、薄羽織、長脇差、ハ、職、掌、柄、サア、皆、さん、其、んな、もの、を、脱、で、第、一、毒、だ、墨、ッ、苦、しい

子、軍師、申、戯、いつ、ち、ヤ、ア、往、ね、ハ、向、ふ、を、見、ね、ハ、な、向、ふ、が、那、んな、よ、拔、身の、槍、を、並、べ、ア、ノ、支、度、で、居、る、ぢ、や、ア、無、へ、か、大、イ、エ、ナ、ニ、向、ふ、よ、ア、構、は、ね、ハ、モ、ウ、濟、んだ、だ、か、ら、皆、さん、着、換、て、宜、ま、い、三、乃、公、が、着、換、たら、夫、で、宜、ぢ、や、ア、無、へ、か、着、換、ろ、ハ、乃、は、暗、の、一、聲、心、な、ら、ず、も、一、同、着、換、へ、竹、槍、手、槍、を、束、よ、な、し、鉄、砲、ハ、孤、に、包、み、妙、見、寺、の、物、置、へ、持、た、し、て、や、る、程、な、う、平、吉、は、御、膳、籠、を、擔、な、は、し、て、川、原、へ、來、り、出、た、あ、つ、た、る、孤、旗、も、小、砂、利、の、上、へ、敷、き、取、出、だ、し、た、ハ、酒、肴、、綠、火、へ、掛、た、大、釜、で、酒、を、温、た、先、サ、ア、ハ、親、分、先、へ、か、初、め、な、さ、い、サ、ア、皆、さん、と、差、す、盃、子、分、一、同、飲、見、合、せ、何、う、な、る、事、か、と、不、審、の、顔、色、、玆、ハ、桑、折、御、代、官、の、手、附、の、目、明、し、唐、木、屋、甚、兵、衛、三、原、屋、藤、作、と、い、ふ、者、此、は、奥、州、名、代、の、目、明、し、三、次、も、親、分、筋、兩、名、の、老、人、草、鞋、掛、で、砂、利、を、蹴、立、て、や、つ、て、來、た、子、ヤ、ア、唐、木、屋、の、親、分、と、三、原、屋、の、親、父、さん、が、と、い、ふ、三、次、は、立、て、遙、か、に、出、向、ハ、三、是、ハ、親、分、か、早、う、か、ら、何、方、へ、甚、何、方、へ

神妙甚ア然う聞て見れば尤もだ、豈や貴様乃公等に無断で自
儀の事はしめへと、天狗のやうだが思つては居た、シテ何ういふ趣
意だ、三、三、ナアニ親分方へお話も出来ねへやうな馬鹿くしい話
でげすや上られたる事なれば疾又私しが上つてお話を致します
實よか差かし、い次第で伊座い升甚何だ、三、エト御存じの髪結の平
吉の妻アを旅人の首藏が問夫をしました、連れて逃ても仕方無
へ遠く退いて蔭を隠しやア兎も角も梁川へ往て直右工門を頼み
直右衛門ハ夫を匿まうのみか、兩人を煽動して桑折の町を歩かせ
さなきだ、若エ者は愚圖くいつて居た處、技に居ります仙之助
政五郎が世間へ聞へても羞らふ事で其のおさきといふ平吉のか
、アを一度び連れて来て亭主に離縁を書かして奇麗札張り流
に呉れてやらうと梁川へ往て直右工門又手を突て頼むと大層夫
を立腹して此等二人を辱しめて、逐返す、續いて遣した果し状、私し

ぢやア無へ三次今聞いたんだが梁川と果し状を取交し、川原へ、操
出多勢を對手に何う此うといふ話、然ういふ事なら何故早く汝
が多忙で来られなけりやア使でも分る事なせ一言云つて遣さね
へ思に掛るぢやア無へが此の陣屋下の場所を持たせるも我々
の了管だ、梁川又ア限らねへ何處と間違へをしやうとも一言は
届けなけりやア成めへがな、三、どうも夫でお出でになつては其だ
恐入りました、突然果し状を照られ卑怯に逃出しやア親分方の
顔も拘はる據ろなく内輪の者を連れて出ては来ましたが御覽
の通り些か是れ三十か四十、ぢやアが梁川は五六百、エ、何うなる
者か百まで生るも三子で死ぬも持つて生れた定業だ間違つたらば
死ぬまでと取敢ず出ました、支度といつても伊座の通と事を好
んで何う此うと異存のあるでは伊座いません、乃は宜しく御察し
を觀分願ひますよと案、又相違の三次の言葉、衣履を見れば至たく

折御代官手附の目明し此れは又た大して顔が違ふと見ねて冠つて居る鉢鉄頭巾美濃紙を脱ぐと熱湯を浴たやうな汗直是はきうも親分此ういふ處へか出で、は甚だ恐れ入りました甚何だ直大人氣ねへといふべきだらう臆の固まらねへ三次を對手に果し状とは何だエ主から見やア小僧子ぢやア無へか詰らねへ真似をするな直へエさうも然う仰しやられぢやア而目ねへ譯ですが據ろない譯で甚イヤ其の據ころねへは彼方でも聞た何しろ三次は別に故意があつて何う此うといふ譯ではなし、高が歩行の女房を旅人が間男をして對手同意なら何でも無へ事、夫を世話をするのも宜し、そんな下廻りでも男が二人貌を揃へか前の貌を立て此うしやうといつて來たらば何故男よなつて先方を男よしてやらねへ使の者の貌を潰し直ぐ其の足で果し状、然うして見ると星が非でも三次を倒して立たうといふ汝勝手としら思はれねへ直

も其儘欄を殺す譯も往す直も回答はしました、據ろなく出ては來ました、が、意旬地の無へやうな寸分だが捨る神あれば助ける神と卑法にも加減をして居ます處へか出でよなつては誠は面目次第もございません甚然うか夫ぢやア其の女を連れ戻して平吉は離縁をやらう、又た汝も首藏も呉れてやらうといふのだな三左に浮座い升甚然うか夫アマア神妙な了簡三マア親分一ツお上んすつて、と敷物を直して二人も盃を差す、甚兵衛ハ藤作に向ひ甚兄弟夫ぢやア梁川へ往て其の女を連れて來て形を附てやらうぢやア無へか驕然うよ、夫ぢやアマア往て來やう三夫はさうも恐れ入りました夫ではと立上つた兩名、川原傳ひよ渡し堀を越へて此方へ來て見ると三次と違つて直右工門竹槍手槍火繩筒、威めしい支度ヤア三原屋の親分が唐木屋がと俄かよ騒ぐ、梁川の子分直右工門も同じ目明しでも己れは松前侯の御用聞此の兩名は天領桑

イニ中々飛だ事を仰しやい升然な了簡は私しよやア運頭無
 へのでがす甚夫ぢやア先方の頼み通り間男の形を附けてやれな
 直エー宜しう伊座い升とも甚マア然ういつて呉りやアお前も男
 だ夫ぢやアそのかさきといふ女を呼びにやつて呉れ直長さまも
 ましたと直右工門が子分よ吩咐彼の平吉の女房を呼びよやり
 程なう来るかさき怖々ながら直右工門の前へ手を突く直ウムお
 さきさん種々親分方が心配して呉んなさるもの夫ぢやア一遍辰
 つて咄を附て貰いねへ夫ぢやア何うの親分方宜しく願い升甚ウ
 ムく確かに乃公が預かつたウーム此の人かとおかさきの貌を
 ゲく眺め甚間男騒ぎではさの迷惑を掛る女を見ればモ一四
 十了間違エの奴だワエと二人も呆れ苦笑ひをしながら甚サア一
 緒に來なよと連れ戻る此方は三次酒肴を收ため待つ間程なくお
 さきを連れ甚兵衛藤原作甚ヤツ三次サア連れて來た是からはマ

ア貴様の裁判三是はさうも御苦勞様で伊座いしましたコレ平吉く
 平ハイと答へをしながらも面白からぬは夫婦の情頼りにおかさき
 を睨み附る様子を見たらか三コレ平吉五十四郡で幾人といふ親
 分方が御兩名奔走をして下さるのだ此の日本で幾人といふ親役
 よも無へ事だ有難エ事と思へ平夫は貰うんなら有難う伊座い
 ますが連添た妻アを取られるのに別よ有難エ三馬鹿をいへ乃
 公等よりも慥かな親分方が就て居なさらア立派な妻アを持たし
 てやる根性の腐つた女古足袋を捨る氣になれ矢立と紙を渡し三
 サア離縁状を書いてやれさんなでも構はねへ汝が書きさへすれ
 ア宜んだ印形にやア及ばねへ搦印で宜い残念ながら平吉は多く
 の人の見て居る前悪筆ながら認ためた三條半三次の前へ差出す
 三ウム感心く流石へ堅氣だ夫ぢやア是ア親分貴所方へか上げ
 サ升マア本來なら私しも着物の一通りもやり度う伊座います

夫だから是ア守り首藏に見せりやア一番張て仕舞ふお前が下
 腹へめて置やア生涯の守り、サア分つたら夫で宜いからサア
 けりやア蝦夷松前が長崎でも此の日本の中ならば通じ親籠で江
 戸まで行ける、必らず江戸へ歸つて生れた家で死ぬ事を考へな
 られ、ばお前の仕合せ何處で那奴よ別れても此の金せしめさな
 持ち、明日にも身分が露見をすりやア契娶に居られねへ身休見捨
 堅氣の職人、六十余州を大手を振って歩ける身の上那の首藏は兎
 通も貼るだらうが、かかるればお前の傍、人間は愚圖だが平吉は
 からの此の末此の女を見捨ますめへの除きますめへのと書附の一
 前の惚た首藏に呉れてやれ、此の後は夫婦、野郎も男の揃くれた
 りとして置きねへ、金ぢやア無へよ守りだよ親分が連れて往てお
 ア些かだは是だけお前にやつて置く、只た茲に一封じ是をお前守
 しも早く江戸へ歸り親々の死水を取らよやア親子の道でねへ、サ

急場の事ゆゑ此の節糸に帯地を一本、是アどうか直右工門へお直
 しなすつて下せエ、甚ウム然うか捨子にも衣裳能く然うしてやる
 出来ねへ事だよく、立派に直右工門へ渡してやるよおさきさ
 ん三次に能く禮を云いねへ、如何なる淫婦も良心に恥入るか赤面
 なして暫らくはさき「お有難うござり升ると虫の鳴くやうな速べ
 やう三次の黙首き三「イヤ姐さん出来た事ア仕方が無へが、乃公ア
 只た一言お前よ、是ア何も愚痴をいふんぢやア無へよ、お前の爲
 を思ふんだから、お前も平吉も乃公の處へ来てからモ、四年越、憎
 いとは思はねへぞうかなして此の島で床屋の一軒も持たしてと
 心配はして居たが野郎は此ういふ意句地なし、此ういふ事になり
 行くもお前ばかりの悪いでもなし、是アア魔のさしたのよ、併し
 お前はまだ江戸より親も揃つて居るんだなア男と逢つて女だ
 せ足に任して旅から旅へ歩いて居るのも本意ぢやアあるめへ少

う往つせエ、どうも親分お待遠さまで座いたしました、おさきは最と
 而目なく習しは親も上らぬ様子始終を聞た藤作甚兵衛「エー
 兄貴年ア若へが此の野郎は直右工門たア苦勞が違は、是ぢやア
 何をか三次の親を立てやらざアなるめへなア、甚然うさ別入仕
 が無へから直右工門を此方へ連れて来て茲で仲直りをさせやう
 藤来るかな、甚夫ア来るア野郎チッとはねてるから、少し煽りやア
 来るよ、藤夫ぢやア然うしやう、三次色々貴様にも散財をさせて氣
 の毒だマア直右工門を此方へ連れて来て茲で手打をさせやうか
 ら、盃銚子を取寄せて待て居て呉れ、三夫ぢやア何とも相濟ません
 甚ナニ然うでもしにやア貴様はうまらねへや夫では支度を
 置けよと二品を包ませおさきに持たせ、梁川方へ来て見れば此方
 はまだ直右工門鉢鉢頭巾で迂鳴て居る、甚何だエ直右工門何時ま
 で然んな扮装をして居るんだ、身体も障らア、サア皆な支度を直せ

「サア直右工門是ア當人の先夫から乃公に渡した、誰様首飾
 といふ者を茲へ呼んで呉れ、兼て直右衛門の後ろに居た奸夫の首
 竊恐る、其所へ出て禮を陳べる、二人が見るとまだ年齢も二十
 四五弟處か、悴のやう、甚ア、是か、女の惚さうな好男だ、夫ぢやア此
 のおさきは貴様の女房、能くいふ事だか、養て食ふとも焼て食ふと
 も貴様の勝手夫から直是はな、か前の親に對してだらう、三次が本
 人へといつて遺した此の二品、急場で仕立は問、合はねへ是アマ
 ア法だからか、前に渡す直、どうも誠、早や何から彼から然う何う
 も行届かされては、誠、私しが面目ない譯、どうもいろ、有難うで
 さい、升、甚夫ぢやア是で異存は無へなう、直へエ何う致しまして、藤
 マア此う物事も丸く往やア、甚、何方、怪我をさしても互、詰
 ちねへ是でこそ目出度エの、甚、時にのう直右工門是なりよして
 置て又た勤で、覓や角あるめへが、其の、日の出来心、あつた時よ

して孟銚子の置き場だけ毛氈は直したよ、夫に昔は目慢も口上も
 やつたがの年を老ちやア嗜舌れねへ、失ア罌すよ、呉れどうか
 マア是までの事は此の阿武隈の早瀬へ流し、後來ハ笑しく交際
 て呉るやう異存がなければ、孟をど二人りは立て酌も兼ね、やりと
 りの濟だ後サア目出度手を貸してと、ヤン、の、手打夫で
 は是で引上げてと聲も應じて一同は異口同音に禮を陳る三ッレ親
 分方を送つてと総立ち直右工門も己れを送ると思ひきや、越し場
 へ行けば三次の子分、子、御苦勞様でした、と唐木屋三原屋
 の二人を送り堤傳ひも上手へ行き一人も尾て來る者なし、不
 がらも仕方なし一人茫然立歸る此方は一同二人を送り神崎へ引
 上りてから祝ひの酒宴初めて子分一同は兼惚庵の爲したる事を扱
 はと心附く位ぬ、イヤどうも恐れ入たねへ、宗匠大イヤ是が逃す進
 まず討たす討たれず、敵も味方も日本の人殺しともなし死にとも

ヤア等閑にして置くからと云はれても面目ねへ、今日直も笑つて
 呉れるか直エーモト私しの願ふ處、甚流石ハ親分えらい處だ、夫ぢ
 やア直右工門お前も從來の大親分なり先方も劍の山のやうに拔
 身を列べて居る處へ子分を連れず、只一人大手をふつて乗込ん
 で那方で一ッ笑つて呉れめへか昔の道樂者の度胸は此ういふ者
 だとも出来星の博奕打へ致へて呉れ直宜うございす宜う伊座エ
 とも、性來愚かな直右衛門コロリと欺され子分を殘らす引上げさ
 せ支度を爲して直右工門二人と諸共渡しを越へ向ふも大方竹槍
 手槍獲物を揃へて居るだらうよ、只一人で往たなら流石ハ梁川
 直右衛門えらい度胸と驚ろくだらうと肩張張て來て見ると何
 圖らん毛氈まで取寄せて銚子孟盛肴餘りの事に呆れ果て暫しハ
 茫然として物をも得言はず、只だキヨロ、として居ると子ッレ
 親分方がと一同は席に附く、甚サア、ア、川原の事ゆゑ席は互も、

さて茲に桑折の俠客伊達の三次去ぬる五月阿武隈の川原に於て
 梁川の直右工門と連入にて己に血まぶれの闘争にもなるべきを
 居り合したる相馬大作固より出沒自在の人物、些かな策を以て此
 の喧嘩は手を混ぜず三次の勝利となり一時は是が爲に大きに二
 次も男を上げ日増に子分も殖へるばかり是又反して直右工門は
 彼の間違ひ以來日に月も子分も減じ自然と其の勢ひ三次の下へ
 附し元より目明し家業如何なる譯で此ういふ事かと考へれば阿
 武隈の間違ひより世間の悪評、ア！然ういや彼の時使ひに來た
 俳諧師子分の奴等が眞槍眞剣で取巻くを見向さるやらずせら
 笑つて居る様子只の鼠ではないと思つたよ、彼奴の爲に圖られた
 かなアノ時ハ只だ一圖に唐木屋三原屋の依估の沙汰とのみ思つ
 て居たが其の種出しハ那の曲者、どうも彼奴の身分が怪しい、奴の
 一ツ種を上げやうと流石は職掌是へ目を附た、段々探索探索を

なし、利前に勝ては何よりだ子「イヤどうも恐れ入りました、サア
 ア勝軍の祝い、くやんやといふ酒宴サア隣村の噂が大變、甲「何だ
 エ此度の喧嘩はア何方が勝て何方が負けた、乙「何方が勝たも
 あるものか、六百人も七百人も引いて往やアがつて些か五十か三十
 の桑折の者に丸負だ、仲直りちう者は半路ハ半路一里は一里其の
 當分よ進んでするが仲直り五丁が三丁も向ふへ踏込めば先づ負
 といふだ夫をハア此方の陣中へ來やがつて手打といふなア降参
 した、ア那アモ、直右工門は駄目だ老惚てるから仕方が無へ、三次
 は剛いと世間の風評、直右工門は之を聞て那ア然うか扱は二人に
 はめられた、然うして見れば使よ來たアノ俳諧師も只の鼠でいな
 んわいと流石は目明し、是より大作の舉動に注目なす、爲に相馬の
 身分露見のお話し次回にて上ん

第十二回

懸け只だ大作の身元奉動をさぐらし、隠れたるより現はれたるは
 なしと云ふて容易に分つた相馬大作の配布者といふ事の體を上
 げ二三の証據も手よ入れて己れは松前侯の御用聞一萬石御小藩
 の勢力では仕方がない、幸い甚兵衛藤作にも幾分のうらまはあ
 る事ゆゑ之を幸いと桑折代官手代横山彌次右工門まで密告致す
 役柄なれば横山も捨置かれず早々藤作甚兵衛を招ぎ、仔細を探ぬ
 る、乃は流石に年來の情兩名を招ぎしハ格別の事、二人は驚ろき早
 速歸宅し使を以て三次の方へ用があるから急速來いといふ、三次
 の身よ取ては二人とも親分同様、よは思つてハ居れど渡世辨ゆ
 不氣味に思いながら取敢ず唐木屋へ來つて見れば藤作も一ッ、席
 何やら二人が心配らしく密談最中、チー三次來たか三エー只今
 何使ひを受ましたから早速上りました是ア門前の親分もか出で
 伊庭いすすか、チーア此方へ運入れ、時よ三次此の春中から貴

様の處に居る藤惣庵といふ俳諧師那れは伊配布者といふ事を知
 つて世話をして居るか但しは全たく知らねへか三へエ基へエぢ
 やア無へ知つて居るのか三、どういふ何でございましてか、藤何う
 いふ處ぢやア無へ乃公も門前も役柄に拘はるほどの事今朝横山
 へ呼ばれて斯々云はれた知らなければ兎も角も知つて居るのか
 聞て三次は太息を吐き獨り思案を定め、思い入て席を進め三イヤ
 ぞうも親分お上からの御沙汰とあつてハ致し方がございません
 打明てか咄致しませう仰せの通り伊配布者南都浪人相馬大作と
 いふ人で伊座い升藤然ういふ者を何故に縁故の無へ汝が世話を
 するのだ三、夫が中々縁故も、親とも主人とも替へやうのない
 方でござい升、私しが十年ばかり跡でした、元宮の間違へから直
 江戸へ飛出して遊んで居る中どういふ杓子か屋敷通りの部屋
 の金博奕へ道入り込んだ處が行く處で幾らかづ、摘みました、伊

腹を肥す事かと觀念をして居る處へ那の大作といふ人が其頃本
 所界限で下総といふ渡り仲間丁度其所へ遊びよ来て間違への様
 子を聞き若癡ながら感心の奴だ、宜い度胸だ、何處の者だと聞かれ
 ましたから奥州桑折の長脇差伊達の三次と升、幾才よなる十九
 でござい升、ヤレ、可哀想に二十才未滿の若エ者を些かの金で
 殺すも殺生命ハ乃公が買てやるしつかまして居なよと云はれた
 時は地獄で佛早速部屋頭役割若い者への挨拶二十何回といふ金
 を費やし私の身体を引取り、知己の方を頼み取換へ引換へ四五人
 の醫者を掛け百日余りの介抱で漸々全快致しました旅の支度には
 路用を十兩江戸土産まで整へてサア直つたら國へ行け貴様のや
 うの度胸があれば確かよ故郷で男になれる此の江戸といふ處ハ
 腕力ぢやア男になれねへ金力でなけれア決して往ねへ、早く郷里
 へ歸れよと千住の大橋まで送つて呉れましたサア私しにも分り

々半年ばかり居る中に本所大川端の最上といふ大きな旗本屋敷
 上総部屋へ宜い博奕が出来て三度行て三度ながらもろくふんだ
 くられて持て居た金の残りす引叩いて終いました誰獨り何と挨拶
 撥をする奴が無へ、無休に障ましました、とうく五兩切りを打ち
 サア身体を張た、命を張た金は一文も無へ首でも足でも持てけと
 盆座へふんづり返り是が田舎の博奕場なら何と掻ひもありま
 したらうが江戸屋敷の渡り仲間言葉も分らねへ田舎者ふざけた
 真似をしやアがる部屋作法だ引べろ、と寄つて集つて面白づくに
 イヤハヤえらい目に遇ひました、其時よやア私しも歸らめて故郷
 で多くの人を惱め血刀の下を潜つて逃げて来た天刀川は、十
 九を一期に江戸の土と度胸を据へて音は出さず、耐へて居ると其
 の末は日が暮れたら大川へ投り込めと懐ろ袂へ砂利を詰められ
 夜に入るを待たれた時は扱は是ア金一升の土にもなれぬ川魚の

ても如何なる嚴刑でも苦しむとせいでございませう予大作先生のお見通しを願ひ升と、鬼を裂き酢で食ひさうな伊達の三次が涙ぐみ盛へ頭を摺り附ての頼と二人りわ顔を見合せて藤ノウ門前成程聞て見りやア三次も免れねへ縁故是も無理の無へ所だ、シテ見れアア弘前へは大悪人、公儀へ取ては罪人も盛岡へは大忠臣三次の爲にやア命の親夫を縛つて何の手柄是ア三次の頼みを聞てやらざアなるめへ甚ア然うともく藤「ぢやア三次汝が頼みを聞う一旦受た其の恩儀を生還忘れず、然う思へば是が人間の義理、其の了簡を曲るなよ今改ためていふのも訝しいが贅澤な事しをしやうとも世も博徒はさ拙ない世渡りは無へ、益業の間違へなら三分か一兩の端た金で可憐命のやりとりもしよアならねへ、切る奴も切られる奴も皆な些かの間違いから考へて見りやア馬鹿くしい家業だ其上ならず正業者から云はせりやア只だ一口にやい

ざ者又た役人の見る時は放蕩無頼の悪黨者イヤハヤ人間の風上にも置けねへほどの扱ひ決してする渡世ぢやア無へ其の軽い身を以て天下の義士とも忠士とも心ある人の賞めそやし、大作さんに命を貸せ、然ういふ事で死んでこそ男と生れた甲斐のある者やくざの者を連れて行やア足手纏い確かな者を五人でも三人でも選んだ上相馬を連れて早く立退け幾らかこせへてやりてエが急場の際ゆゑ澤山は無へ是だけ持て行けど後ろをふり向き用筆筒の抽斗より一包みの金を出だし「サア小遣いだ持て行け物をも得言はず三次ハ暫し涙ぐみ暮れて居たりしが「有難う存じ升くく私しは固より先生が聞たなら嘸喜こぶで多座いませう浮意見入従い膳ッ玉を研き上げて先生の力よなります藤「ア夫でこそ、去ハいへアノ人も望みが買ぬき貴様も其の場を逃れたら何日でも茲へ戻つて來い我々の目の黒い中なら是までの腕にハしてやる

すか出でを願い升といつて来い、此の折大作は書見をして居まし
 が何事なるかと座敷へ出れば三次を初め七名の子分、車座になつ
 て酒の支度三「サア先生此方へ大「ヤッ是はさうも御馳走先づ一ツ
 とさす盃三「時に仙之助政五郎皆んなに是まで打明て話さねへの
 は不實のやうだが夫よは種々譯もあるゆゑ此の宗匠は森惚庵夢
 中といふのは早速の偽名實は南部の家老職相馬大作を仰しやつ
 て今ぢやア殿しい御記布者さればこそ此の間川原の達人も思ひ
 のまゝ一勝を得てお主らも喜ばれたが此の先生の策略だも
 のう、夫アありさうな事、夫を是まで明さぬのはいろく此の方の
 身の上は都合のあるゆゑ夫ハ恨んで呉るなと初めて明す三次の
 話事の意外は相馬も驚ろき大「何故親分三「エ一突然だから嘘か驚
 ろきで湯座いませう今唐木屋へ呼ばれた用事といふのは是々云
 々併し「ア買てやつてお呉んなせエまし目明しにやア珍らしい

三「有難う存じ升、と涙と共に納める金いと嬉しげに立上り暇を告
 るを呼び戻し藤「ウム三次念の爲だから断つて置くが陣屋へ密告
 をしたのには直右工門だよ三「へエ左様で湯座いしましたか、何やら
 り黙首て三「畏こまりましたさうござんへ宜しう、長年親しう交
 際した此の人達へも今生の別れと思ふか固より情の深き男ふり
 り待つ所へ戻つて来た三次子「へエ親分お歸りでしたか今お迎ひ
 に行うと思つて居た所で三「ア一然うか多苦勞、平吉は居るか平「へ
 エ三「何でも宜いから頭附の物で酒の支度をして呉れ子「心得ま
 したと子分達有合せし魚酒の支度も出来れば三「仙之助政五郎
 は居るか子「へエ居り升三「一寸居るなら来て呉れ、二階に手懸さみ
 をして居た子分共彼の仙之助政五郎重藏彌助勘次長藏などいふ
 七八人の者「オッ親分お歸りでしたか三「アッ離れへ行て先生よ一

人物私しが是までの次第を咄し貴郎のか身の上を打明けたら二
 人とも斯々いつて呉れましたと始終を聞て大作も涙を拭ひ大
 一某しの微忠を哀れみ然ういふて呉れましたか老人の志しは忝
 けないと唐木屋の方へ向つて拜を爲し並居る子分も貌見合せ〇
 エ一實は私し共もアノ時から只の俳諧師の氣遣いハ座エます
 ゆへ無肩書のある方だらうと思つては居りました大名を二方
 まで命を取たといふ相馬とやら大作とやら仰しやる方ではない
 と思つて居りました是までの失禮はどうか御免を願ひ升多くの
 者も言葉乗を改ため禮を正しく挨拶をするゆゑ大作は首を振り大
 イヤく夫所ろでは御座いません此上幾らか親分初め皆さんへ
 御迷惑の掛るは必定夫が誠よか氣の毒三エ一何も然んな事は夫
 も今云はれて來ました、汝たちも後學の爲だ聞て聞け唐木屋も三
 原屋も口を揃へ是々いつて呉れたのは乃公ア此の腦髓へ染み渡



つた、サア先生是までの三次ぢやア伊座いません、魂ひの洗濯して
 掛るんで伊座い升、汝等も其の了簡で于一承知しました成程親
 爺さんのいふ通り一ツ間違やア二分か三分の端た金で切たり切
 られたりしにやアならねへ此ういふ方へ命を貸しやア死んだ時
 での器れになる及ばずながら伊力といつた處が我々風勢智恵は
 固より腕づくでも夫ア先生の足許へも押附く所ハ御座いません
 が是でも命は一人前命だけの御助勢なら出来ねへ事はよもある
 めへ三ア夫が何よりよく云つたと三次も喜び三コレ平吉食
 は固より堅氣だ明日か明後日唐木屋か三原屋の親分が来なさる
 だらう夫まで茲の留守居をして火の用心を氣を付て居れよアノ
 人達の事だから貴様の立行の出来ねへやうな事は無へ役を離れ
 身分を捨てサア立退けといふ折に小遣いといつて此の百兩よし
 此の家へ捨て行くとも是だの事をする人だ確かよ汝の身の事

けふ心掛り猶子の様子、彼の男は聲を密め男「親分ですか三郎」
 へ二陣屋の仲間幸助で伊座います三「りム役割此の夜更に何處へ
 往た幸ナ先刻唐木屋の親爺さんから頼まれて、大方お前さん方
 の梁川へ行つしやるだらうが向ふの家へ切り込やア女子供のあ
 る處自然と世間を騒がせるから直右工門を此ういつて呼出して
 呉れろと頼まれて来たました今茲へ連れて来ます茲も待てか出で
 なせエまし、聞た三次は飛立つと思ひ三「然うですかどうも役割苦
 勞様、龜の甲より年の功、何と先生届いたおぢやアありません
 か先方へ切り込やア思慮なしの世間騒がし、シテ我々にやア釣り
 出せぬへ是りやア宜い處へ氣が附ました、さうかお頼り申升、役割
 一「す待て呉れ懐中へ手を差し入れた、三次胸巻を解き摘み出したる
 金子は四五兩三「役割少しだが飲代是ア有難うは座い升忍れ入り
 ます、幸助の喜び金を納め提灯をさげて足を早めて梁川の直右工

はせうよでもして呉れるから夫よは少しも心配するなといふを
 傍から子分の者子「夫ぢやア親分此島は三「ウム固より今夜限り
 親分も別れに乃公を呼戻し念の爲めだいつて置く、陣屋へ密告し
 たのは直右工門だよと二人の言葉扱ひ出掛けて直右工門めを殺
 して行といふ計だ、畏こまりましたと承知をして出て来たのだ明
 日とは云はねへ今夜の中梁川へ切込込んで直右工門を首にする
 のだ依て門出の此の酒盛、サア威勢よく飲んで支度をしろ、居合する
 は喜こび勇と、疾から夫ア待て居た事サア夫ぢやア兄貴直に支度
 と三次を初め子分の者渡世柄とて手早の身支度長脇差を横たへ
 合口は懐ろ手等を定め相馬を連れて九名の俠客住馴れたる我が
 家を跡、囁ふ紛れ阿武隈の渡しを越ゆる梁川村、直右工門の住ひ
 を差して今堤上へ上らんとすると御用といふ手丸を握り、提灯に
 と、多勢の来るを待つ様子、三次を初め子分の者、提灯といふ提灯だ

アアア結構で伊座いますね夫ぢやア是で何ぢ甘い物でもと妾に
 云ひ付け金子を一両サツと包んで盆に載せ甚だ是は御疎末では
 伊座いますすが何ぢ伊菓子でも是はさうも濟ませんね折助ハ實う
 のは持前だが此方から貨つては誠まごうもと流石に良心に咎め
 るか手を出し兼たが悟られてハと思つたか幸さうも有難う伊座
 い升御遠慮なく頂戴直エト誠に輕少又た是から陣屋の御用を
 開くやうになれば役割は禮らしし事も出来すよと我が身の上
 に振り掛る命の際とは知るよしなく支度もソユク直ハア侍
 速で伊座いまして締りを氣を附ろよと云い附て幸助諸共出て來
 る堤傳ハ早く連れて往て渡せば役は濟む事と一足出だす幸助は
 何につまづいたかハツヤリ提灯を消した幸アツ是は困つた親分
 火道具は伊座いませうか直イイヤ持ませんや幸ア困つたなア
 直ナニ役割私共は若い内から夜道をするに照暗の方が知つて宜

門の宅九ッ過だが丁度博奕を終つた所か重なる子分は歸宅なす
 妾を對手ハ兼酒を飲で居る所幸ハ一寸お尋ねす直ハエ難
 幸桑折の陣屋から出ましたが横町さんが仰しやつたが御用向の
 伊使一寸明てお呉んなさい直右工ハ陣屋の使ハと聞て驚ろき
 猪口を置いて立て來て直是アさうも役割御苦勞様ハ早く明けて
 直さうも深夜に御苦勞で伊座いました幸エ且那の仰しやるの
 よハこの間の捕者今晩手當になる早々直右工門ハ出張しる手配
 は附て居るから一人で宜いからと此の伊手紙をと差出す書面開
 封なせば幸助の口上に相違なし手配は確かにあるよ依て其方一
 人出頭致すやうとの事直ア左様で伊座いますか夫アさうも何
 しろ伊苦勞様でしたマア伊茶を入れて直に直右工門は支度を爲
 し直コレおみつ役割に一口幸イエ親分私しは御酒は一向往ませ
 ん直ハエ上とませんかハ幸エ一く答る事も出来ません直夫

を政五郎は飛掛り忽ち首を打放す大作は此方よあつて大ア
 手柄く、時又役割は怪我さるやアしねへか幸へエ茲に居り升
 兼ての事だが随分氣味の悪い者大是は御苦勞で伊座いまして手
 前が相馬大作伊骨折は千万忝けなない些少ながらと差出す金子一
 へエモ一何う致しまゑて今直右工門の處でも一兩貰つてね、誠よ
 ぞうも是は氣の毒でしたよ本來なら此方から線香でも買て行て
 エ所賃ひ心が悪う伊座にましたよ、一同は笑いながら一同イヤモ
 一夫は然うでしたらうねへサア死骸を此うして置ちやア成らね
 へ幸助は傍らから一寸懐中を見てお呉んなせエ先刻の手紙を持
 てますから大ア一成程能く氣が附た血に染たる書簡を取出し懐
 中にある紙入財布落散らぬやう内懐中へ確と納め死骸を那方の
 溜りへ隠す金の多少に拘はらず懐中の物を取る時は強盗と見做
 さるゝとの事破るれば殺人罪は免れぬまでも賊名を着まひ

う伊座い升燈といふ奴は此方の目印になつて往ねへ奴、夜道
 暗いの又限り升脚れねへ道なら兎も角も何十年來歩いた街道、サ
 アく往ませう幸「けれどもどうも間違ひ！直ナニ間違ひがあるも
 のかねお前さん「幸夫は然うですが親分の聲と私しの聲とは是で
 大變に違ひますねへ直夫は年が違ふものを此ア大きな聲で呷を
 するに如かずと幸助矢鱈又大きな聲を出し四邊をキョロ／＼歩
 み来る河原の此方待ち構へたる九名の俠客男「待て直右工門「躍り
 出たる大喝一聲「アツと驚ろく幸助は那方の道へ横ッ飛び流石よ
 直右工門は飛びさり直何だ狼狽た真似をするな桑折御郡内の伊
 用だろ男何を吐しヤアがる卑怯未練の直右工門其の御用が勘辨
 ならねへ伊達の三次だ見忘れたかと切り込む一刀身ハ交せども
 尖さき切先肩先真深に切り下げられアツと云い様よろめくを横
 手に廻つた仙之助突を掛たは左りの脇腹「ギャツと其の場へ倒る

師とも思はれず、時に依りては三次と頼を集め、敵刻の密談何か、
 子のあつた事ならん、と心に留先し、流石の活眼、酒の支度をなして、
 市「サ、三次まだサ、サ、酒も飲まねへ、ア一杯やるべし、ア、
 然うかへ、然ういふ事なら、御馳走にならうと、奥底もなき親身の朋
 友、差向飲み初める、市「時に三次ア、俳諧師兼惚庵といふ人は、
 一体何だ包むも隠すもねへ、打明て云つて呉れな、三「イヤ、夫も
 今日は何と口まで出たが如何にも世間を憚かる事、夫ゆえ、
 ア、咄をしねへのは、誠ま不審のやうと思ふだらうが、實は入り組ん
 だ身分、市「然うだらう、さうも肩書のある人、物だと思つた、
 ナ、何だ、三「那ア、の盛岡の御家來、今は浪人相馬大作といふ御配布者
 よ、市「エ、何故又た然んなヤ、ハ、イ者を連れて居るんだ、三「此れに
 は、いろく深い仔細のある事、久しい跡に、茲へ来て、長らく世話に
 なつて、江戸へ出て行た時の事よ、ア、ノ人の爲に、此の命を助けられ

といふ所存は、感心各々、刀を淨め、手を洗ひ、三「夫で役割、お前さんは
 幸「エ、私しやア、是から直よ、江戸屋敷へ往て、終うか、前さんも、
 落ちやア、往ますめへ、マ、ツ、ト、下つて、越しませう、御川の提灯のある
 を、幸い、幸助、案内をさせ、夜の間に、七八里の道を、往ねばなるまい
 と、晝夜を分たす、西南を差して、路次を急ぐ、幸助は、江戸馬喰町、四丁
 目なる郡代屋敷へ行く、さて、又た、三次の一行は、茲に、下総八日市、
 に、博徒六才市、是は、三次の兄弟分、此の人は、博徒社會の變者、家号
 を、堀田屋といふて、一時は、茶屋旅籠を爲せしが、當時は、休業なして、
 一廉の貸許、中年にして、親孝行の聞へあつて、公儀よと、褒賞を戴た
 く、職業、よしては、珍らしき人物、是へ草鞋を脱ぎ、八人九人、一ツ家、
 も、居る、兼るから、夫々、子分の處へ、割り附け、梶田屋、居るのは、三次
 大作の、兩名、着せし時は、矢張り、俳諧師兼惚庵、夢中といふて、近附き
 爲し、さて、五十日、居る中に、流石は、市兵衛も、親分、株相馬の、舉動、俳諧

せと仰しやるなら此うして平常養つて置くヤツサ仲間も小百人
 ざれもこれも血の氣の多い奴ばつあり命の懸換なら幾らもあり
 ます遠慮なくお使ひなせい何時でもよろしう座いますから
 と勢ひ込んだ市兵衛の言葉を聞いて喜ぶ大作あぶるゝ涙を袖にか
 さへ大へ有難う座ります兼て三次親分から御氣性は聞て居
 りましたか某しの微忠を憫れみ左様仰しつて下さる御心底我が
 君公の聞し召めば嘸御満足遊ばさん心根に徹して忝けないと英
 雄は情は深く又た涙もろきものか玉なす涙を拭ふ折小蔭に立
 ち聞く二三の子分恐るゝ座敷へ這入る子甚だ失禮でいせへ
 ましたか茲で伺つて居りました身内ばかりで仔細もないがど
 に探索があらうも知れずモ、お話は是ざりに併し先生今親分の
 申した通り命の懸替なら澤山居りますから夫ア御安心を願ひ升
 アト止さう夫も矢ッ張り其の話だウム熱いのを持って來い跡は各

夫ゆゑ是まで思ひ詰て居る所丁度今年の春の事小坂峠の切通し
 で乞食ふなつて忍んで居るのを漸々見出し俳諧師と偽はりア、
 いふ訝しな名前を附けて乃公が所へ置く中に此間話した梁川
 の道入れ、其時の差がねも矢ッ張りアノ相馬先生乃は一且宜つた
 がアノ直右工門の卑劣根生から唐木屋三原屋の情よよつて國を
 脱し名前をばらして茲へ來たのだと江戸表より此方の一伍一什
 の長物語り聞た市兵衛も溜息を爲して市ア、然うか然ういふ人
 か貴様の爲に命の親と聞やア繋がる縁の兄弟分乃公が爲にも思
 ある人敗たえて近附よならうと樂寐をして居た相馬を呼び市兵
 衛は言葉を取つて改ため市さて先生甚だ失禮のやうだが只今初めて三
 次に就て足下のお身の上を聞きました、イヤモ、驚ろき入た思召し
 失禮ながら威服といふ外はございせん、只だ此上は役もも立た
 ねへヤツサ者だか愈よ足下がウム此ういふ事だ腕を貸せ命を貸

にしよやアしねへ乃公は乃公だけの力を奮ふ手傳ふならば其方
 事當人が居なくなつた然なら宜い最う用は無へと云やア只の
 人だ乃公ア是からモ一層力を添にやアなるめへと思ふ此の一
 言に勵まされてか三成程兄貴のいふ通り夫で乃公も心持も直つ
 た夫ぢやア此末何分とも市チ一合点だサア主等も其氣でと重立
 たる子分に云ひ含め是より二人の侯客は多くの子分を八方へ
 手分を爲し大作の様子を探らすか話髪つて相馬大作八日市塙を
 夜逃を致し又々江戸へ出府いたし頃しも十月の下旬神田三河町
 四丁目に越中屋茂右工門といふ番組宿屋是は封建政度の時世よ
 は江戸表に幾らもあつた家業山出しの無宿者をば幾らも養つて
 置き旗本屋敷や御家人の些か二人か三人の仲間の元締を致す世
 に之を散半元締といふ其處を頼んで何方へか奉公と云ふモ一十

月からは是まで五人で住んだ屋敷も八人十人の所も十五人とい
 ふ仲間の居る最中又た翌年の三月頃よなれば引拂ひと名づけ
 慮もなしに解備を致す勤むる者も別段之を苦にもせず又た道中
 稼ぎと地方へ出て行く冬季を待ては出府を致し是も又た散半奉
 公茲よ飯田町煤の木坂下よ高は五百石細井九助といふ五百石の
 伊旗本勤めが兩番其所の仲間奥州福島の百姓和助と偽名を爲し
 陸奥の言葉を其儘に福島くといはれて働いて居る翌年の春正
 月元日三の登窓といふは是は又た格別の事の大御門前の雜
 沓は夜の明ぬ中より在府の大小名惣登城大作は細井の法皮花色
 の太い股引で太手を這入り百人番所の溜りへ来て大エ一少々御
 役人様よサ上役何だエ仲間山出したな鳥が来た何の用だ大
 へエ一私し奥州福島の者でございませがアノ私の兄貴は只今江
 戸表で何處か大々名さまの部屋頭を勤めて居り升私も國から歸

居紙を二枚江戸土産に賣ふた羊肝の折を持て勝エー脚前私し
 中乃公も一ッ願みがある宅へ師直ぐ求めてあつたか半切の
 處へ頼んだ清サム御山よ居る先生だ勝ア一然うか此の人の居る
 つく芋へ騎の生へたやうなものでも大々名前には書くものだ何
 ア清三郎言いはた清三郎と違ふて書書とも少しは見ゆる勝
 襖の寄工是は又た清三郎と違ふて書書とも少しは見ゆる勝
 と同村で同役を勤める萬屋勝藏開業の當日祝い旁々来て見れば
 て齋ふた筆如何も能く出来た清三郎は喜んで自慢よ建て置く
 手は金銀を望ます日ならず齋てやつた花鳥人物山水と悉を離れ
 せんか清エー何でも宜しう座い升大然んなら宜しい固より對
 問のある時奮いてやつて下さいな大エー宜しい好みありま
 へ頼むが私ぢやア折角能く出来たもの汚すやうなものか前さん
 さん是は門前の百姓だが今度茶屋を開業するので此の襖を私

寺院御朱印百六十石中々其の一派では勢力のある寺開當住職日
 榮上人此の僧は數年千ヶ寺の修業を爲して日本全國を遊歴なし
 又た學力も頗るある者道徳の聞へ高く衆徒の人望を得て當山へ
 直り在職十四年頃本堂修繕の付合天井の書割住吉の奇工を
 どの注文幽かよ聞て喜ぶ大作直ぐ支度を改ため住吉の奇工を
 竹我と偽造なして誕生寺へ來る幸いの事ゆゑ直襟庫裡へ通し手
 見世に一二業書かして見れば中々の書風住持は喜び早速に雇ひ
 入れ暇に明して十六羅漢天女花鳥の書を寫して居る茲に門前よ
 住居して八州の目明し杉浦屋清三郎といふ今度普請をして茶屋
 旅籠屋を致さうといふ襖を十六枚土地に經師屋もあれば白張よ
 仕上り御生寺の住持も書心もあるもの、江戸より繪師を雇ふとい
 ふも大形寺へ往て住持を頼まうと住持に遇つて云々と頼む日夫
 は乃公ぢやア往ねへ幸ひ先生が居なさるから頼んでやらう飯田

夫然うかのア愈々御配布者かな何しろ萬屋月が燈らざア出役はな
 ら實は内々様子を操ると江戸ッ言葉違への無へも何處かよ残
 らふ者だといふので高橋は半年も閉めを食た其の竹我を聞たか
 ら奥州訛り是はアツキリ大作と附た星には違はあるめへ清成る
 程然うかのう然ういア書師とは云へねギョッとした那の目
 附夫ぢやア愈々御配布者かな何しろ萬屋月が燈らざア出役はな
 親をして禮をいつて往た事があらう清ウム然うく然んな事も
 た江戸へ出て家業をしてエと態々此所へ禮ま呼びか前の所へも
 して立たせると一年半ばかり立てやつて来た身体ハ達者になつ
 治なら確かに癒るといふからか前達にも世話になり路用を持た
 友業奴は奥州青森の者だアをかん込み難かしい所故郷の嶽の湯
 ヲッ何うして夫を主が勝ア久しい跡も乃公ソ所に居たアノ
 親をして禮をいつて往た事があらう清ウム然うく然んな事も

最も信ずる所是は進んで書さうなもの勝幾ハ一度び大作の貌色
 を見て歸りしより何か心よ當る所があつてか折々は茶受の鮮な
 ぞを附け先生是をかんささいなごいふて書を寫して居る所
 へ来ては相馬の舉動をさぐる日ならず出来た二枚の書勝ア一能
 く出来た有難う伊座い升早速江戸へ仕立まやります伊禮は何れ
 と云い捨て寺を出るなり我が家へ歸らず杉浦屋へ行き客のな
 のを幸ひに主人を二階へ呼び上げて勝時に清三か前ハアノ書師を
 知らねへか清知らう答はねへか前も知るめへ勝イヤサ知らねへ
 ぢやア勝ねへ再々の伊配布者南都浪人の相馬大作は那れだ清ニ
 も荷の先生よか願ひが伊座い升口何だ勝エー清正襟を願いた
 です甲冑と束帯と勇ましいのに似々しいのを二幅物よした
 うかか願ひ升法華寺へ来て清正公の書を頼むゆえ住持は直ぐ
 に竹我に其由をいふ竹我は固より忠勇無双の壯士清正公如きは
 最も信ずる所是は進んで書さうなもの勝幾ハ一度び大作の貌色

からう馬鹿をいへ出役を待て旦那云い上げ首尾よく御用と
 なつた處で幾らだニ精々凄美は三分か一両アノ囚人なんさア別
 段何も公儀で何うして此うしてと瓦を起して探すンぢやア無へ
 青森侯で探ねて居るんだ是から江戸へ飛出して屋敷へ訴てエリ
 やア、ヤンマ、ヤンマとした糺入りがあるらうといふもの、サア一緒に行け
 少しも早い宜らうと食慾邪慾の勝藏清三御用を名よして江戸
 へ乗出し青森の伊上屋敷へ云々新様く申出で何は兎もあれ
 持參なしたる二葉の書、是まで屋敷へ高橋方より取上げた書も
 あるゆゑ比べて見れば寸分違はず黒色落顔年齢は幾つ容
 云々奉勸此うと手に取る如くに出る掛の役人初め大
 守の喜び取敢す兩人へは凄美として金百兩結拵なる料理まで下
 し置かれさて捕縛方は如何なしたるものか其の職掌とあるから
 探ぐるが何うぢや勝左様に伊座い升、誕生寺は我々の寺頭伊朱印

地の事ゆゑ勘定公事方江戸奉行の御手入でも月番寺社奉行添
 書がなくてはなりません左様をつくうの事をして居ては取逃す
 かも知れませんが、此の書を読み清三郎も頼んだ書工の禮を致しませ
 此の書を頼み清三郎も頼んだ書工の禮を致しませ、依て此の禮
 と云いなして相馬を門外へ釣出します其の趣向は斯様く手筈
 は此うく役人等と打合せ歸村を爲した五月七日續いて青森
 家より出役の者は際々に委を換へ目立たぬやうに杉浦萬屋の両
 家へ止宿す、八日よ至つて兩人揃つて誕生寺へ参り勝エー御前様
 先達中はいろくどうも有難う存じましたッ、江戸へ往て居り
 ましてまだ、禮を致しませんでした金で禮を了した者で伊座
 いませうか、夫も又た清三郎のいふは失禮ぢやア伊座いませ
 か此の十日の鯛の寄りを伊座いふは失禮ぢやア伊座いませ
 田舎料理でも御酒家で入らつしやるから御酒を上げて一ッ結

の多い方へくると集る餌を集る魚の群へに洩れず如何にも珍ら
の鏡ふて漕出す大船小船は此方に一群那方一群餌のまき方
の五月十日は國々よりの参詣者其の織の題目を拜見せばや
ハ悉く此の生洲の中へ投入るが例此の洲の中へ入った魚は幸
す依て魚は育ちほうだい此の海濱の漁師漁をして戻る残り
卯時の政府へ願ひ殺生禁断不思議や開明の今日も漁獲を許さ
四十間に二百間自然石の生洲、また不思議の濱此の洲の浦ハ百
持出だす程なう船は鯛の浦、また不思議の濱此の洲の浦ハ百
最中勝「サア」先生此方へと鯛の間、花菰を敷き其處へ皿鉢を
萬屋と二本の轆轤を前後よ立て居合す人も十四五人今船中で料理
升「サア」入らつしやいと砂を蹴上げて波打際大きな漁船へ杉浦屋
に往たがるから小僧を二人りと兩人か四人様へエ宜しう御座い
からうから是をか一人り、ア、又た小僧めが珍らしくもないの
に往たがるから小僧を二人りと兩人か四人様へエ宜しう御座い
開き住寺の前で茶よ呼ばれて居る處へ迎ひに来る勝藏清三阿
御出でを願ひ升、堅く約して立歸る程なく十日の早朝相馬はとく
人「エ、何方様もお出で御坐いませんですか先生お獨り大「ヤア」今
日は寺は急しなない、久遠寺から院代が来て居て山國の人で珍らし

を下して御馳走をしたら何うであらうと此うアますすがちらに
致した者でせう、日「ア」飯田は那ア無惑の人だ、金の禮より其方が
宜らうよ、兩人「夫ぢやア左様致しませう、日「チ」先生お前も其方が
宜しからう、大「エ」モ、私しも夫を疾から樂しんで居りました、日「
然うか、夫ぢやア、マ、ア、一ツ拜まつし、宗祖大師未だ遊長
といふた折、弘長二年五月十日東よ向ふた初めて唱へた七字の題
目、數十尋の潮の底の岩石に留まるといふも一ツの不思議、大分
詣人も出ます、勝「イヤ、モ、誠よ結構で御座い升、夫では然ういふ事
よ致しませう、十日は早くお迎ひますから御取前にさうか
御出でを願ひ升、堅く約して立歸る程なく十日の早朝相馬はとく
起きて住寺の前で茶よ呼ばれて居る處へ迎ひに来る勝藏清三阿
人「エ、何方様もお出で御坐いませんですか先生お獨り大「ヤア」今
日は寺は急しなない、久遠寺から院代が来て居て山國の人で珍らし

も無念や其場へ捕縛即死は三人手負九人大作の直様着類を着せ
 換へ山駕籠へ乗せ多人數前後を取圍み勝鬨清三も諸共に江戸表
 へ送送重役は跡へ残り死亡者手負の手當は充分さて青森侯は此
 上もなきお喜び兩人へは充分のお手當彼是れ七八百両懐ろへ遣
 入るはせ二人の喜び手の舞ひ足の踏所を忘るゝばかりさて邸内
 の評議には國表へ連れて行き逆磔か牛裂きか録引よ釜煎よと其の
 殿刑の評議最中此方は誕生寺の住持苦勞人だけよ相馬の忠節を
 憫れみ且つ二人の目明しの不徳談を惜み何しろ公儀と違ふて青
 森殿へ連れて行かれたら賑や惨酷の事を致すであらう凡て公儀
 の御手ならば御法通りの御處刑無罪なるべきやうはなくとも
 何うかな公儀へ引上させたい早速兩名の役僧を以て寺社奉行月
 番坂淡路守殿へ所たへ出たるは是まで法を破り罪を犯す不
 つて寺罪へ來るも御勘定公事方町御奉行共信掛り御役向より御

しき事なれば積年忠義入苦心を爲し愉快といふは事よだに知ら
 れ相馬も我を忘れ差すがまよく受た歪何時しか前へ十五六何
 人々も珍らしき魚の寄りへは目も觸れず相馬の全休を注目なす
 ハ扱はと心附たか誰の知らず後ろの方一の器を海中へアッ
 ン投入れたるを合圖と見立て乗合の者共二十人はと御用と呼ば
 り大作に組んで掛る腰に疵持つ相馬の事ゆえ兼て用意の短剣は
 肌を離さず覺ぬの一刀折嵩つて組附くを時期を圖つて刻ねす
 途端に打たれて船は顛覆其の役の者兼ての覺悟只だ驚ろいた
 のは身延の院代山家に生れ木登りは大天狗だが泳ぎとなつたら
 少しも知らぬ己での事土佐坊となる所小坊主ながら海濱に成長
 なしたる二人の者漸々小僧が助けて歸院を致す相馬大作素なり
 といひ勇なりと雖ども捕手は多人數殊に水小多くの人を懸めし

人^も先^づ是^を一^つは安堵^さて勝藏^{清三}如何^{にも}惜^むべき奴^ら那^ら
 ア^いふ者^を村^内へ置^ては此^の村^の風儀^を乱^す不^實と云^はうか不^不
 道^徳と云^はうか不^在でも構^ははん家^内を殘^らす追^拂へ住^ひは釘^附
 け^女房^子供^は驚^ろいて、サア此^うなる^と知^己でも親戚^{でも}一^晩で
 も泊^る事^が出^來ない是非^{なく}市川^村の番^人藤^{九郎}の方^へ暫^らく
 厄^介二^人りは左^様な事^{とは}知^らず持^附ぬ大金^{を得}て俄^か大^盡費^し
 澤^を盡^し遊^廓に二^晩三^晩愉快^を盡^して江^戸土^産を澤^山求^め通^し
 駕^籠で歸^村をすると驚^ろいた金^は儲^かつたが家は失^なつた段^々
 聞^けば前^が恐^ろし立^腹どの事^何しろか詫^を致^さうと村^役人^は
 でも肝^心の氣^に入^らた者^那れを頼^め是^を頼^めと頼^まうにもホ^ッの
 土^産又^は先^達て禮^願ま^れて見^れば役^人も仕^方なく住^持も就^て詫^を
 をする上^人は固^より承^知の上^だから持^て來^た土^産も禮^もミ^ン
 取るさうせ不正^の金^だ決^{して}還^すな何^{でも}取^れ持^て來^る者^はは

手^當有^之節^は輕^重の差^異なく必^らず寺^社御^奉行^御月^番の御^添
 書^は有^之者^今回^も限^り其^の御^役よ^らぬ青^森侯^{より}御^出役^有之^の
 無^下に當^山へ履^い置^い書^工飯^田竹^我とい^へる者^を召^捕右^に付^て
 は多^くの負^傷者^も有^之我^が境^内靈^地を移^しし事^甚だしく然^らば
 向^後如何^{なる}方^{より}手^當有^之い^も寺^社御^奉行^の御^關係^無之^事や
 此^段奉^御伺^い願^坂侯^御一^體の上^最とも思^召して御^老中^安倍^信
 中^守殿^へ伺^ひ相^成る安^倍侯^も同^勤へ御^協議^{の上}如何^{にも}青
 森^家の我^意我^儘相^馬大^作とい^へる暴^行者^我が手^に乘^らざるが故^に
 に其^の捕^縛方^を公^儀へ依^頼なし在所^の知^れたりとて公^儀へは、伺
 はす自^儘に寺^院境^内を移^す條^以ての外^右大^作は公^儀に於^て聖^儀
 の筋^有之^よ依^て勘^定奉^行公^事方^河野^但馬^守御^目附^益添^にて青^森
 へ談^判大^金を費^やし漸^々轉^じしたる大^作ハ空^{しく}公^儀へ御^引揚^と
 なり廣^生寺^役債^大ひに喜^び書^面を以^て此^の事^を住^持へ通^知す上^に

は不思議に思ひ忌日にあらで何用かと早速對面例もながらの圍
 基兩三圍つて庄さて御前今日突然來たのは外では沙塵いません
 清三と勝藏が御前を失取て居所立所ま困るさうか詫をして呉れ
 ろと頼まれましてが差すも縛るも彼等が渡世は一ツ勘辨して
 やつては下さいませんか住持は笑いながら日ヤア庄兵衛ごんは
 御存じないからだが仔細を聞いたら中々に貴下が詫をするはさ
 いふ譯でいないのだ實は云々斯様く委細の話聞くと庄兵衛
 が怒つた庄夫ア御最も貴下はまた御出家だから私なら二人りを
 叩つて終ふ何で其の詫を致しませう然ういふ奴等では座いま
 すか此上貴下が御勘辨なすつても私しが承知しない飛だ座いま
 致しましただ暇を告げて歸村遠方なれば半途で日が暮れ夜路を
 恐て急がせると山下まで迎ひ出たの居候の博奕打池田の提灯を
 機張か各自よ提げ于エ一旦那お迎ひ庄ア御苦勞く物詣りよ

て信者に施こせ詫は決して聞かないからと風の悪い和尙誰をさう
 頼んでも届かず、茲に同國朝比奈郡池田村池田庄兵衛といふて豪
 家の小旦那仔細あつて若隠居、擊劍が能く出來る上総木更津の河
 野四郎太夫の門人、一刀流の名人次男に相續をさして目分は隠居
 始終長脇差が二十五六人の名候をして居る房総の博奕打此の庄
 兵衛も就ては劍術を學ぶ者あり依て自分賭博の時は見向きも
 せず高尙な人ではあれど門人は大概博徒親分でない親方でない
 池田の旦那くともつて用ゐられる此ういふ性質の人ぢやから
 人望もある醫生寺は祖先の菩提所月よ一度は法事の爲に參院我
 し住持とは大仰よし此の人を頼んだらと二人は遙々池田へ來り
 委細は話さず罪人を揚げて地頭をしくじつて居所よ困る困るを
 話し詫をして呉れろといふから固より此の人古今の慈善家、一も
 二もなく承知して二人を歸し翌日駕籠に乗て誕生寺へ來る、和尙

でも往はしまし然んな大形の事をするなよ子夫でもどうも
 方へお出で、伊座いしました庄夫何しろ御苦勞であつた、鶴籠の
 傍へオイと来たのは六才市の子分眞弓の勸次、お神樂岩といふ二
 人の者二人今日は御命日でも伊座いませぬよお詣りで伊座い升
 か庄ナアニ詰らねへ事を頼まれて問の悪い思いをして来た勸次何
 でしたエ庄ナアニ目明しの勝藏清三に頼まれて往て聞くと此う
 いふ譯合、面目次第もない、面を染めて歸つて来た話を聞た二人の
 者夫だと云ふと提灯を提げたるま、馳出した庄ヤイ勸次岩何處
 へ行く返事も答へもあらばこそ凡惱世を蹴るやうに姿も見えず
 山の方此方は庄兵衛、扱は何か縁故のある事かと黙首ながら池田
 へ歸村二人の者は夜を日に繼ぎ立歸つた八日市場二人親分お出
 で、伊座いますか、丁度三次と市兵衛が酒を飲んで居る處三ツム
 岩、勸次か何だ兩人ながら提灯を持って何うしやがつた岩ナニ親分



一十二百三 山 檜

相馬先生の居所が解りました三十一先生が解つたレナ何處に岩
 此の春から小湊の彌生寺に書工だといつて居たんださうです、
 ルト先月の十日鯛の集の日彼の鯛の浦で青森の人敵の爲に食
 込んださうで伊座エす、三十一青森の手へ食エ込んだ岩へエ
 夫は困つたなア公儀の手ならイヤ知らずアノ屋敷へ上られちや
 ア何ういふ事よならうも知れねへ夫ア何しろ大變だ勘が兄貴
 解らねへ三公儀の威勢で尋ねてせエ是まで知れねへ先生が屋敷
 の手に懸るたアどういふ事だらう勘夫ア十二親分前の目明し
 清三郎と勝藏が己が使はれてる旦那やア言ひ合す態々江戸へ
 山で往て書て貰つた齋を証據に密告したの違へは無へ夫で
 生寺の和尙も大層怒つて二人は其儘所拂ひ其の訛言を庄兵衛且
 那が頼まれて寺へ行くと此ういふ譯だと思つて來る途
 進ひ往た私共が聞たから直よ此方へお知らせす三十一夫ア

時は清森は改易盛岡は半地奥大名岡家へ理の附く事に至るさす
 れば是も不穩の沙汰は必定法律を正しく調ぶる事の出来ぬ人
 其の後には伊調べもなく只だ其工風のみを致される中よは面倒な
 斯様な譯なら大作に一服もつてと早くいふ毒殺仰しやる方も
 るなれど主計侯の思召にては大作ハ法律の罪人よせよ主家へ取
 ては無類の忠節亡父の名義を淨めとんいふは是又た孝養忠孝同
 道を全ふ致す可惜名士毒殺も致し兼る三年揚り屋へ入れたなり
 翻べなし同年十一月廿八日夜半頃半屋敷表門前小傳馬上町から
 出火明歴の昔より門前へ火の移れば囚徒ハ輕正を問はず一時解
 放されば半内の者前町の出火と聞て嬉し喜こび小踊りをするま
 で半屋同心か鍵番惣半の戸前を開く半番石出帯刀火事裝束にて
 馬乗玄臨前へ移り出だし惣半の囚人に向い帯火急の場合重役へ
 問はず予が一存を以て解放す鎮火早々三日間内に當邸焼跡へ馳

第十四回

早迷大儀だつた夫ぢやア岩勘次差したのには勝藏に清三郎と確か
 よ知れて居るんだな勘然うでがす三定めし土産は持て来たらう
 なア岩土産といつたつて那んな片田舎茲まで持て来るやうな者
 は御座いません三馬鹿をへ間拔望む土産は外ぢやア無へ何故
 其奴等二人との首を土産に持て来ぬエンだ二人へエ成程其の土
 産は忘れました直に往て持て来ます二三日待てお呉んなせよ
 草履も脱で其足で土産を取りよ立歸る清三郎勝藏の身の上こと
 如何ならん後にとそ思ひ知らるゝ
 さて又相馬大作は一度び青森家へ捕はれしも隠生寺住職の情よ
 依て公儀へ引上と相成り北町奉行榊原主計殿のか儀へを受け吟
 味中揚り屋仰せ附られるさて主計殿も此の綱べに就ては實に御
 迷惑なる事其故如何となれば大作の申立を定木よ取り才判なす

八九丁の嘘を繰なし潜出せしハ大川端永代佃田濱沖品川浦も早
や過て鮫津の濱へ着致す上陸をして暗まされ此の人々南番場
の畑中掛離れたる一軒家木戸へ来て合圖の呼子答へと共に開
門なす○サア先生此方へと這入て見れば立派の農家○サアさう
予先生へ此方へとの案内も座敷へ通る燭台へ蠟燭を点じ手あぶ
りへ火を取り厚き布團を設け○さう予先生此方へとやをら上座
へ直し各々冠れる頭巾を脱ぎ一同先づ先生お達者で座いまし
たか大作も不思議さう見れば三次市兵衛其他の子分大ヤ
ッ親分か達者で伊座ゆましたか三マア貴郎もか達者で何よまで
伊座いまして大是は又た如何なる事で三マア先生今晩の事
に附ましては茲に居ります此者は鉄砲長次と申しまして私共
の兄弟分此の本宿よ吾妻屋といふ女郎屋を出して居ります者今
晩の事に付ては種々散財もさせ又た機々骨を折らせましたぞ

附けよ、神妙よ歸せ致する者は罪一等を減する予よ、神妙に立退け
と大聲よ呼はる、一同聲を揃へて一同か有難うござとまする、早々
裏門の方へ駈け出たす此の聲を上げ押出たす大作は事よ馴れざ
る者只だ揚り屋内よ迂乱くとして居ると給仕の者給ア先生
立關へモ一火が附ましたサア早くと手先を取て引出たす裏門の
方へ来るも最早各々離散して二人三人出で、行く門を出るなり
誰かは知らず後ろよりムツと組む驚ろいて見れば刺ッ子の長半
纏をフツリと着せ同じ頭巾を冠せ兩人左右から手を引き先へ立
たる両三人高聲を揚げ携へたる手鏡を振廻し芋を洗ふ如き群集
の中を左右なく通り大門通りより濱町河岸大川端へ来る岸に着
せたる荷駄利一艘先へ立たる一人が聲を掛ければ答へと共に掛た
る機橋サア此方へと其船へ乗込む者も十四五名何か様子分ら
ぬぞ我が身に取て不利益とは思はれず誰彼となく只だ無言忽ち

の折御飲を下ましたは勘次さんとも岩松さんとも仕儀せた本人
の名前は聞かぬも定めて伊身内の方とこそ心得居りました扱は
此の二方でありましたか誠に有難う存じ升勘岩ナア私共
の手柄ぢやア座いません那の事又附ては池田の庄兵衛旦那が
骨を折て呉れました大夫人の事又附ては池田の庄兵衛旦那が
中に夜も引明け主人の差圖又焚せし塩風呂呂大作家に浴湯をさせ粥
なごの手當をさせて兼間をも受て暫時休息出牢者へ對して早速
酒肴の馳走は却つて宜くなものか其處等は經馬の者共四五日
手當を爲して大作の衣類支度長々の入獄に月代の延たを幸ひ給
髪も結はせ圍碁二段免許山田永齋と偽名を爲して同年の月迎ま
で置く三先生御窮屈でも是へ御遣入んなすつて下さいと一問の
中へ連れて来る新木の板柵まで堅牢にさしたる大きな箱壁は四尺
横が二尺二三寸ありさうな中央よ腰を掛るやうになる木綿なが

うチマア禮をいつてやつて下さいまし大夫ハハ初めて伊
意得ますか毎々親分方には色々迷惑も懸まして又た貴下よ斯
る御苦勞は禮は言葉には盡されせん何うも恐れ入りましたと
只だ涙を流し頭を下るのみ市兵衛ハ膝を進め市さて先生一ツ
めて貸ふ事が伊座います此の勘次と岩松が貴郎を差した勝三清
三郎は首よして來ましたよ是等もア手重い仕事旨くやつて來
ましたぞう少擧てやつて下せよまし大ヤッ其の事は誠よ忝けな
う伊座い升親分私は是まで此の大望を思ひ立て以來敵と致する
青森侯を初め其他の人々へ附て憎い忌々しき奴なごいふ事は
豪も胸には浮みません然るを彼の勝藏清三郎如きは憎んでも尙
能足らず一度び娑婆の土をふむならば我が望みも差立て彼等二
人りを引裂かんと思ひ詰て居りまして其後問もなく新入の給仕
上総生れの博奕打か相撲又とかいふもの彼の喉よ承はりヤッ其

といへる者と口は善悪ない下郎の事、誰彼へ話し忽ち八州も是を
聞込にになり當宿の御用開鎖倉屋喜兵工是は人呼んで佛喜兵工
六才市の叔父市兵衛を呼んで斯様く告げたるから市兵衛は
大ひに驚ろき早速立歸り三次大作へ相談を致すサア是は大變何
よせエ其ういふ事なれば茲を先づ立退かうと取敢ず支度をし
て夜よ紛れて名々我家へ立歸り日を重ね水戸の磯の濱へ上陸な
し城下へと思つたが旅装ひでないゆゑに道を轉じて岩井町の遊
廓常盤樓といふへ登樓を爲し銚子在の百姓と偽はり揚女郎を爲
し景氣よく愉快を盡し多分の散財三サアお前達は彼所へ行って飯
を食たら何うだ我々ハ野暮のやうだが此の勘定をするのだから
書附を持って来て呉れよと附を出させ支拂を爲し女郎小供ハ元の
座敷へやり大作の敵方も元の座敷へやり小牧といふ此の部屋へ
三人が集まつて大作は形を改ため木さて親分只今に至り放蕩不

ら更紗の布團夫へ腰を掛る左右から布團を持ち掛け依り掛つて
其儘眠るも差支へない様子三「此うしてか連れやます習時御
屈でもどうか両便は是へお落しなすつて下さい、今利のづんどの
花瓶生桐の蓋を打つて両便に差支へなし食事も袋へ入れて水も
へ入れ正面から蓋を打つて荒縄よからげ桐の薄板へ平仮名で書
き附けて大切なるこわれもの手荒く扱ふべからず濡物用心併し
横逆さに致すべからず是れ今横や逆さにされては大變荷物も出
來船積にして一番三次も附き添ひ八日市場へ送る市兵衛方へ
置き兼ねるか裏町の極樂寺といふ門徒寺住持の古今の道樂者市
兵工といふ懸意故事實も打明て此の寺へ頼み矢張山田永齊甚打の
先生といふて居たが隠れたるより現るゝはなしと横柴の博奕打の
か相撲又といふ是は先年江戸表で入半なし揚り屋の給仕に行き
大作を見知つた者か此所の先生はか尋ね者の南部家來相馬大作

世間の人の知らぬ者依て一人でなうては所詮此の望とは何れ
 次だど世間の耳目に懸る方々夫が爲す誠と困ります私しは幸い
 ません夫ゆゑさうか退いて下さい三次も今は打解けて三エー先
 生解りました宜しう伊座い升夫ぢやア然うしないさてか二人り
 も故郷を捨て今の身の上國へ歸る譯にも参りますまい夫ア勿論
 です依て私しは船中でお二人の熟睡の中に認めて置いた其の手紙
 此れを持って遠方ぢやが盛岡へ往て下さい作事奉行下斗米総兵衛
 といふ方へお出でなれば是に認めて御座いますから主人僕へ
 願ひ立て御身様達の有附はさうにでもなります三エー私共
 はさうならうとも生ても死んでも是だけの命貴郎こそ大事の身
 の上、夫ではさうか此上とも大エー云はれるまでは伊座いません
 本懐の後命運盡すか目に懸らば委細の咄書さけ上三入を樂
 しみよか待ちやして居り升市夫ぢやア三次我々は盛岡までの路

實の事をいふやうだが私しが御岡名と一緒では到底此の望みは
 買ぬりません甚だ恐れ入たが今夜別れては下さいませんかを聞
 て三次は不満の色三「夫は先生情けねへぢやア御座いませんか
 所を捨て家を捨てる何のソノ法を破つて身体を捨て命を捨てる
 といふ私し共夫ア私しは容易ならねへ御恩を受けて居るもの、此
 の兄貴は何うで伊座いませう只だ貴下が志しを酌分て同じやう
 に骨を折て呉るのを邪魔と仰しやるのは情けねへぢやア御座い
 ませんかと云ふを傍から市兵衛は流石の老功市「三次然ういふな
 汝も乃公も此の苦勞をするのは何だ只先生の志しを買かしてエ
 ばつかり就て居やうと脱で居やうと先生の望みさへ買ぬきさへ
 すれば大満足然うぢやア伊座せんか子！先生の望みさへ買ぬきさへ
 命勝ても負ても何れも二人が邪魔といふ論は伊座いませんか何を
 いふにも貴下方は世間へ脱の賣た人達那れは祝田屋だ、那れは三

を下る兩人二階の手摺に送る大作是れ今生の別れならんと思へ
 はいと懐かしく見送る二人り見送る一人斯ては果じと大作は
 思ひ切て立て切る障子方なく市兵衛三次下町へ出て宿を取
 り翌朝早々出立なし陸奥の盛岡を差して行く日を重ね着するな
 り書面の表下斗米惣兵衛方へ着し手紙を出だす不審と思ふて開
 封なせば亡父惣兵衛の贈又聞た君家の忠臣相馬の手紙早速草鞋
 を脱がせ一間へ通し厚き手當扱書面を開封なせば是まで本人が
 苦心の概畧此の一通は國家老花輪殿とある又一通は御當主へ
 右二通を携さへ言上君公も御一讀あつて嘆息を遊ばし其の兩名の
 なして大守へ言上君公も御一讀あつて嘆息を遊ばし其の兩名の
 者よ目通りナ附ろとの御沙汰放蕩無頼の博奕打盛岡侯へ目
 り伊座近く伊召し秀之助よとの密面で承知致せし其方等の志し
 予も満足ぢや文中に委細はあれど又其方等の目撃なせし事是に

用せぬあれば宜い、是だけ先生へツツクリ譲らう、兩人懐中の金子
 を残りなく大作に渡し些かに十両ツツク、を懐ろにして愈よ別れ沈
 んだ咄で酒の匂ひもなくなつたと手を叩き女を呼んで姉さんや
 まだ酒が飲み足らねへ何でも宜い早く酒肴を取寄せ別れの盃
 又々女を呼寄せ大作は聲を密めて大ハテ姉さんや我々のやうな
 在郷者を能くとりもつて呉れて忝けねへ偶々の事だから最う一
 愉快盡さうと云ふんだが金が足りなれ此の下町又親類があるか
 ら其處へ金を取りよやる一人で行ちやア怪ぶむから二人りやる
 女「オヤ然うで伊座いますかナニ御都合で伊座い升から跡でも
 宜いでハ伊座いませんか大「イヤ然うでねへ金がなくつちやア愉
 快よならんぢやア御苦勞でも伊座所頼むよ市「ア、宜しい行て來
 やう女「左様でございますかどうもモ一遇う伊座いますのに市「ナ
 アニ馴れた道だ何でも無へ夫でハと三人ハ一緒立上り表階子

無へか何故傍へ往てねへ小ハイ雷の落るやうな大騒イヤモ一此
 已等ア年が年中か茶を引んだ多分の散財をした大事の客ぢやア
 ハイぢやア無へ問拔めへ客を扣へてやがつて何の事か夫だから
 勉強者に見えぬ主烟部屋に居る小秀ぢやア無へか小ハイ主
 郎も聞馴れない事だから高調子に笑つて居ると帳場に居た樓主
 て居たから其の枕許へ来て此ういふ客だと咄をして居るとの女
 て客を寐かし烟部屋へ来て朋輩女郎のお離といふのが風邪を引
 ふのは初めて餘まり側へ居たくもない客人御病氣に障るなら
 居ろといふ客は毎晩あるが二分やるから他へ往て寐て呉れとい
 ニッ出した小秀も變え思つたね二朱やるから曉まで此所へ寐て
 か外へ往て寐ては呉れまいか甚だ濟ない是を上るからと小粒を
 るとさうも疝と障つて病いが起るお前を嫌ふ譯ではないが何方
 るよ時に姉さんや乃公は妙な病があつてのう、若い女が一緒疝
 るとさうも疝と障つて病いが起るお前を嫌ふ譯ではないが何方

て物語り呉れよと懇篤なるお言葉葉両人もハツと両手を仕へ市兵
 衛三次片身代りに其の上江戸大川端最上邸にて命を助けられたる
 より以て來審さじに言上上を初め傍の人々秋の夕よ水を打てる如
 く寝々々々として聞居る大守の知らず識らず舞をかこり遊ばす
 望の事久々厚涙を催はし其の以上三度まで目通りを仰せ附ら
 れ右の傍に言葉重役を召され協議の末秀之助の頼みもあれば兩
 人を取立て得させ新規抱席といへば目立つ故片岡利右工門と
 いふ侍士頭の家相續人がないに付て養子となして片岡市兵衛
 吉田順右工門といふ是は御近習是も相續者よ於て吉田三次郎各
 々百俵五人扶持を下され子孫を盛岡へ残すは是れ積善の餘慶這
 は後のか咄し此方は相馬大作二人りを立せ先づ宜しと安堵の思
 いなれども長き別れと思へばいと氣の毒も又た胸に餘り腕又
 いて居る所へ敵媚の小秀秀下はか休みなさいますか大ア一寐

所へ來り歸合の同心に云々と告げたるから近傍の目明し番人呼
にもし知らしめてはと言葉を締め何やら頻りに打合せ直ぐ其足で役
さて兄弟飛んだ客だ那れは是々云々と聞いて主人も驚ろいたテ、振
出さず鶴へエ、邪魔様御免と云いつ、廊下傳ひ内證へ來つて鶴
客の兼親唯見れば如何に御配布者の相馬大作驚ろいたが親へも
を注ぎますと油さしの積で行燈の戸を押し開けながら火盆よ覗く
入り初密と開けたる襖の中、屏風を掻遣り、枕邊の行燈鶴へエ、油
といふ姿密と二階へ上り小秀の部屋様子を探り、油さしを掲げ、香
か夫は職掌着類の上へ常盤の印半天を着し油さしを掲げ、香
なら宿屋へ泊るが宜い分らねへ客人だなア事に據たらと思つた
は主人と鶴屋鶴吉、マが兄弟是ア訝しいなア女と兼るのが忌の
だなアアア、
なさい旦那様か休み遊ばしてと會釋をしながら還入り行く間に
は主人と鶴屋鶴吉、マが兄弟是ア訝しいなア女と兼るのが忌の
なら宿屋へ泊るが宜い分らねへ客人だなア事に據たらと思つた
か夫は職掌着類の上へ常盤の印半天を着し油さしを掲げ、香
といふ姿密と二階へ上り小秀の部屋様子を探り、油さしを掲げ、香
入り初密と開けたる襖の中、屏風を掻遣り、枕邊の行燈鶴へエ、油
を注ぎますと油さしの積で行燈の戸を押し開けながら火盆よ覗く
客の兼親唯見れば如何に御配布者の相馬大作驚ろいたが親へも
出さず鶴へエ、邪魔様御免と云いつ、廊下傳ひ内證へ來つて鶴
さて兄弟飛んだ客だ那れは是々云々と聞いて主人も驚ろいたテ、振
にもし知らしめてはと言葉を締め何やら頻りに打合せ直ぐ其足で役
所へ來り歸合の同心に云々と告げたるから近傍の目明し番人呼

頃には婿妓も年期者といふて何れの遊廓も樓主の壓制、理舞も振舞
もなし、樓主の壓制、世にいふ鶴の一聲、ナル、しながら小秀は帳
場へ兩手を突く頭をなにし、咄鳴て居る處へ水戸の上町水府の御
用聞、鶴屋の鶴吉といふ目明し常盤樓とハ兄弟分、役人見廻りの案
内、役所よハ居ず常盤の見世先帳場へ通ると主人ハ筋を立て叱言
最中、鶴誰だ小秀ぢやア無へか何を失策つたエ宜い女郎だがなア
主ナニ親分今夜乃公が問が惡いので大事の客だと思ふから氣を
附ろといひ、附たのに届かねへから今叱言をいつてる處、鶴夫ア小
秀宜くねへや、然ういふ在郷の客が大事だ、小、イエ私しも然う存じ
ますから、傍へ往て居りますと此う、仰しやいますゆゑに今
煙部屋へ來てお難さん、咽をして居る所で、伊座ひます、鶴、然うか
夫ぢやア主人是が惡いのぢやア無へや、聞て樓主は笑いながら主
然んなら早く然ういへ、餘計な叱言を云はれて居やがる間、抜の奴

取ては有難き事勘定奉行公事方河野但馬守へ此由を達する早速
 水府へ引取りに往かねばならん八州役へ目明し人足三十余名怪
 しげなる駕籠を釣せ水戸へ乗込み下町の脇東陣へ着し早々奉行
 屋敷より引取り早速渡す相馬大作前後を取圍んで水戸を離れ牛
 久の原へ来た頃には夜よ入て間もなく月の末とて黑暗人足を急が
 して来る一層の確發一同アツと驚ろく所へ發砲を合圖に發る
 多人數包頭巾の黒扮装各々小銃の筒口を揃へ男「待て」ハツ勿体
 なくも我々は弓矢八幡大神の眷族なり罪人ながら大作は天下
 に稀なる大忠臣弓矢八幡御用もあれば早速囚人を引渡せ役人一
 同貌見合せ愚圖くいは「打拂はん有様」エ「恐れながら御勘定
 公事方同心河井一作上ますが我々も小給ながら公儀の役人、水
 府公より御引渡しの大罪人御渡しす事はなりませんが八幡宮の神
 ん男「ナニならん」「イエ、渡しす事はなりませんが八幡宮の神

上げたる事六十余名夜の明ぬうち手當ぢやとツツと登つた常
 盤の樓上小秀の部屋への入口左右充分よ手を廻し、先へ進んだ鶴屋
 鶴吉襖を開き屏風をはね退け御用と云いつ、折重なる、別起んと
 爲したれど數日の勞れよ深くの熟睡空しく其儘縛り附く、役人初
 め一同の喜び夜明を待て上町の奉行屋敷水戸町奉行中山幸左工
 門一通り取調べる南部浪人相馬大作幸ひなる哉當時水戸黄門
 其頃百ヶ日のお國詰水府は代々副將軍御上府なる者御相續副將
 軍拜命となれば水戸表に百日の御休息國表の政務を正して江戸
 出府其の御休息中幸左工門より御家老中山備中守も隨行の事
 ゆゑ此の山を上る、黄門殿へ上申致すと上は名代の烈公兼ねて
 伊聞及び盛岡の誠忠臣相馬大作斯ふいふ性質の豪傑は大の御最
 負万事備前守殿へ御内意お調へも奉行の手を除き備前殿御自身
 のお調へ備御法なるを以て公儀へ引渡す左様心得よ、大作の身に

作不審は晴れす大考ひますが技は何れ男弓矢の神の内陣大
ハ、ッ、是へ影の屈脱の石の上へ座らせ、又々彼の笛呼、ナリと
へて探明る雨戸暫らく立つと、シーッといふ警蹕の聲に連れ出座
在ますは方未丁年ながら高き貴人白の袴召しに長羽織十六
七の二人の美女遠山を畫きし洞燈を左右又照し、傍問近く進
みに相成る八幡宮出座在ます予よと左右の聲、ハッ、と石上へ両手
を突く御聲も聞はしく盛岡の忠臣大作なるか、予は弓矢の神ぢ
や其方の誠忠に免じ一度び白日の身として取らす其の忠胆を
む勿れ大ハ、ッ、男是や大作大神より下され物有難く頂戴せい
大ハ、ッ、と再び両手を仕く中、ハ、と立切る雨戸の中又た警蹕と共
に入御なす御様子男サア此方へと引出だした又其の駕籠へ乗せ
何やら大きな包みを籠籠の屋根七八人にて之を上げ夜の明る頃
四邊りは一面の小松原衣類は是にてお着換へ召されと取下した

力を以て御連れ遊ばすのには敷し方が座いません、一同は笑い
ながら男流石は江戸役人捌けた一言然らば八幡宮の神力を以て
召連れろ「へエ宜しう座い升男ッレ往け、といふと相馬の乗た
る其の駕籠を十五六人取附て飛ぶが如くに引返す殘りの者は百
余人小銃の筒口を揃へて乱射、アッ、と驚ろき倒るゝ者もあるばか
りなれども是は悉皆空砲大作は夢に夢を見し心地、二三里も来た
かと思ふと或る寺院、駕籠の締りを打毀し大作の繩目を解くも一
切無言又た一挺の駕籠へ移し夫れ上々といふと飛ぶが如くに
け出だす、暗い處を何處へ行くやら何やら深々しき石垣の中、幾重
か越へる土塀の脇、駕籠を下して聲を密め男先生か痛みはなかつ
たかへ大有難う存じ升異状は御座いません男夫は重疊一人ヒ
と呼笛を吹けば塀の内よも答の笛那方の内より門を開く、イヤ此
方へと案内の者暗い處を手を取て這入て見ると築山泉水漸々大

是師弟の情何よ致せ出遣入り多き平山の塾園ひの中へ隠し置き
 食事も洗湯も遊歩よと出拂ふたを幸い平山先生園へ來り相馬と
 門弟も密談中案内も入れず不慮に刀を提てオカくどカトウ
 何やら密談中案内も入れず不慮に刀を提てオカくどカトウ
 口を開いて入り來る者あり二人の不慮驚ろくを男イヤ甚だ不慮
 慮がまししいが是へ参りしは相馬に遇たいばつかかりイヤ久しぶり
 だつたなア云はれて見れば覺悟のなき人大先生下は孝是は一
 番町の伊旗本島田勘左右衛門殿「イヤ島田勘左右衛門では相馬
 は知らん見忘れたかな大ヘエ男ア然うであらう久しい以前此
 方が本所で下総といふて居た折私に最上の下総部屋を預かつて
 居た勘藏だ大「イヤ部屋で御座いましたか平山も不審の色孝一
 へエ貴下が左右な事を勘イヤ夫アの種々仔細のある事でイヤモ
 若い時は不品行で逐々父兄に勘當され小石川の美濃市の世話

其の包み中は覺悟の我が着類懐中物や大小まで以前の如く其
 儘外よ一包みの金子股引切半纏熊谷折の途笠草鞋までも取崩へ
 素銅の矢立よ古びし手帳丸水御飛脚宇野矢兵衛初めて心附たる
 大作は大地へハタと両手を仕へ御本城の方を三拜九拜大「ヘーッ
 扱は水公の恩召しよてあつたるか涙よ暮れて居る中よ若侍け共
 の駕籠へ不用の品を取載せて御免と會釋を致しながら元來し道
 へ歸り行く此方は大作最早氣丈夫今は白日晴天なり日本國中
 手を振って歩行は自由是なればと尙一層奮發力も彌増せり天下は
 廣く往行のなるもの、目差す敵の盛岡殿は道中は不安との事か
 御病氣披露で歸國もなさらず上へ願ふて江戸在勘さすれば地方
 には居て何か致さん又々江戸へ出府いたす旅地と違ふて市中では
 水府の飛脚では通らず姿を替へて久方にて四ッ谷伊賀町の醫師
 平山孝藏の許へ來り絶て久しき再愛の弟子身分も忘れて置まふ

の私の屋敷へ來玉へ出遣入りは少し所ハアツな邊鄙なりお前
を置くは最屈竟大有難うハ御座りますれど夫も同じく發覺致せ
ば又々御前の御迷惑勘何のハ勘當されて十年下郎で暮した
勘左右衛門兄の死んだを幸いと實家の相續した所が糶米取りの
三百石折助で居た昔を思へば詰らん身の上此上何年立たうとも
役なり出世の見込もなし僅かな事をトツコも取られ甲府勝手は
目の當り顯はれやうとも何の者かわ決して氣遣いし玉ふな最と
淡泊の島田の一言平山師弟も喜んで大然らば伊言葉に甘へ勘ア
一番町俗よ袋横町高家由良播摩守の後ろ島田の屋敷へ來る家來
といふは下郎の盛松只だ獨り盛お歸り遊ばせ勘ウム盛や酒の支
度は出來てるか盛ヘエツテ御座います勘ウム此方へ持て來いや
ア先生一杯やんねへ盛も此所へ來い盛ヘエ有難う存じ升小祿な

よなり武家奉公といつては濟ん最上の部屋を詰かつて居たが
頂此の馬どんが下総といつて麻仲博奕の初當喧嘩の挨拶身
分不相應の金を抛つ様子子がどうも只の鼠ではないと思つて居た
よ何やら恐ろしい部屋へ間違ひ役割を呼んで仔細を問けば田舎
博奕打の三次とあり是々だといふに附き不便と思へる部屋を作
法致し方なく捨置たが此の相馬が挨拶と多分の金も捨て其の者
を助けてやつた離れ業折助は得難い者と思つて居ると案の條
青森の太守を殺し市中の木戸へ其の貼札此うある事と云つて居
た引續いてのアノ手際イエ驚ろいた胆力よの此間お目よ掛つた
アノ時よ計らず用場の客から見たヲ以前を問へば先生の取立始
子エ親子の情とて匿まうたか併し發覺した時ハ先生の迷惑致
は一番達引所考へは附たが話恐ても打明ては呉まい寧ろその事
と不作法を承知で是へ參つた譯悪く思ふて下さるなサア相馬を

か身の上又た何時でも命のか入り用なら二言たア申ません幾つあつても足らぬへ此の首御遠慮なく御使ひなすつて下さいます命遣ひの荒い奴漸々相馬も安堵を爲してア目目の寄る處へ玉をは是だ主家の武運地も落ちず此ういふ人々の後ろ橋なら三次や市兵工とは事變り是は便りよなるべきものといふ此の盛松如きハ世間で貌を知らぬ者使ひ進にハ都合其の元締は天下の直参小祿ながら島田の殿様是でこそ急よ味方を得し心地是より大作委を獲し彌々青森侯の舉動を窺ふ

却説茲に盛岡家抱へ席の御徒士小頭藤良助といふ武士あり生れハ農家六の戸の豪農又右工門の倅先祖ハ盛岡の藩士何千石を賜はりたる重役事故あつて浪人二君に仕へず僻士へ移り有金にて山林田畑を求め身を安らかに送る代々主人は廉直にて次第に

第十五回

れども天下の直参下郎の盛松取膳勘「サア一杯飲め盛へエ有難う伊座い升勘「ハ盛此人はのうお配布者の相馬大作だ、大作は驚ろいてギョツとしたて盛松といふはモ一四十余才両眼ますごみのある一癖ありさうな人物盛「サヤ左様でございませるかへイヤモ一先生殿様は此間から貴郎のお贈さうかしてお連れやしてエといつて入つしやいしましたたが能くマアお出でになりました私しは甲州勝沼無宿盛松とす下郎で伊座います此のお前様の叔父さんの勤番中飛だ多思になりましたか召し返じになつたと聞てきんで居りましたが私しも遠々博奕場の間違から八九人叩ッ切と國にも居られず江戸へ出て昔の伊座を其儘に此うして矢ッ張り御厄介よなつて居り升貴下のお咄も殿様から聞て居りました同じ世間を暗くするの後の咄になるやうな然ういふ方もある者を手前勝手手の感情から映くするのハ情ないもの貴下も然ういふ

長官を憎しむ得るは、茲にあり、事八石四人扶持にて、御徒士役、良助の喜ぶ
 正理は、明らか、聰明の君公、ゆゑ、良助の志しを、憫み、兩人の不、休才を
 へ、の、後、胤、たる、も、の、大、守、へ、此、旨、を、言、上、り、た、す、再、三、の、調、べ、に、良、助、の
 料、理、屋、町、奉、行、も、段、々、重、役、へ、問、ひ、合、す、良、助、の、身、許、を、問、へ、ば、書、臣、國
 し、て、右、の、次、第、と、苦、し、紛、れ、の、自、首、証、人、は、井、上、左、門、話、を、な、し、た、彼、の
 へ、自、訴、調、べ、に、な、る、と、二、人、り、は、生、憎、事、切、れ、ず、偽、り、切、れ、ず、殺、さ、う、と
 返、し、此、旨、を、囁、す、左、門、は、驚、ろ、き、捨、て、置、か、れ、ず、良、助、を、勸、め、町、奉、行、方、を
 痛、手、も、が、く、太、田、の、右、手、に、切、る、止、め、を、刺、さ、ず、其、儘、よ、師、の、家、へ、取、て
 右、手、の、方、を、より、切、掛、る、丈、助、の、抜、刀、を、も、ぎ、取、り、突、き、を、掛、た、る、急、所、の
 切、ら、せ、一、脚、上、り、て、腰、を、蹴、り、前、へ、ガ、ツ、パ、と、伏、し、た、る、を、存、を、ふ、ま、へ
 ども、屈、せ、ぬ、氣、丈、の、丈、助、太、田、が、エ、イ、と、切、込、む、一、刀、休、を、釋、じ、て、空、を
 は、彼、等、の、奸、策、か、と、茲、に、初、め、て、心、附、身、掛、へ、た、れ、ど、己、れ、は、丸、腰、な、れ

す、つ、た、も、ん、だ、話、の、末、然、ら、ば、モ、一、五、十、兩、出、し、て、下、さ、い、關、良、助、で、書、
 き、上、や、う、と、い、ふ、の、ハ、奴、等、が、此、の、二、十、兩、を、重、役、へ、賄、賂、と、し、て、事、を
 爲、さ、ん、の、策、所、が、賄、賂、の、足、ら、ん、の、か、且、は、家、法、か、さ、う、も、夫、が、成、立、た
 ん、恐、ろ、く、金、は、使、つ、た、が、さ、う、し、て、も、良、助、の、願、ひ、通、り、に、は、相、成、ら
 ん、と、い、ふ、て、左、門、も、媒、妁、な、る、も、の、暇、味、よ、は、し、て、置、け、ず、小、人、窮、し、て
 法、を、犯、す、の、習、い、寧、ろ、の、事、喧、嘩、を、仕、掛、て、打、殺、さ、う、と、心、附、た、ハ、良、助
 を、未、熟、と、見、た、か、二、人、り、は、關、へ、書、面、を、送、り、愈、よ、お、話、が、出、來、る、か、ら
 か、出、で、を、と、い、ふ、招、待、状、日、頃、の、願、い、も、叶、ふ、て、か、と、そ、ろ、ろ、嬉、し、く、招、
 ぎ、の、席、へ、來、つ、て、見、る、と、料、理、屋、酒、肴、を、整、へ、良、助、へ、馳、走、固、よ、り、好、ま
 ぬ、酒、類、り、に、酔、退、は、致、し、た、な、れ、ど、目、出、度、い、酒、ぢ、や、か、ら、と、い、は、れ、無
 理、に、強、ら、れ、酌、酌、な、す、を、つ、け、込、ん、で、夫、で、は、支、配、へ、過、は、せ、る、か、ら、往、
 て、呉、れ、ろ、と、連、れ、出、し、た、探、練、場、酒、よ、事、寄、せ、喧、嘩、を、仕、掛、た、好、ま、ぬ、酒、
 ま、酔、ふ、た、を、幸、い、抜、刀、な、し、て、嚇、か、す、と、關、ハ、固、よ、り、出、來、る、腕、前、さ、て

としてあらア此ア小兒だなア外の字ハ解らねへ○是はか前大
 の者だ奥州盛岡の住人尾崎秀之助△か前盛岡はか出入屋敷ぢや
 ア無へか十六や十七で此所へ額を上るやうぢやア今は大層な者
 でございませうねへ○大層所ろぢやア無へ此の人は大層者だ△
 何故○何故つて青森の殿様を二人も殺したか尋ね者の相馬大作
 といふなア此の人だ△へエー那ア又た何だつて殿様の爲に領分を
 殺すんだ○マア屋敷で聞て見ると尤もサなア青森の爲に領分を
 取られて恥を掻いたといふンで何でもマア殿様が恥を掻けば家
 來は死ぬものだといふ學問があるさうだマア其の大名といふな
 ア殿様が變死をすりやア國換とか半地とかになる譯なんださう
 だ然うなれア取られた領分も盛岡へ歸る殿様の恥も雪ぐ夫でや
 ったんだな△然うして自分か何うなるんだ○自分はマア忠義
 だつても人殺しは逃れねへ御處刑よなるのよ△剛い人だなア、ア

といふては此君ならば命を懸けて御奉公を致さん所存程なう江
 戸詰を仰せ附られ八石四人扶持でハ故郷へ歸る錦でない、せめて
 何十石とたり槍一筋の身分ならば大兄の手前もあるものと出世
 がしたさに愛宕山將軍地蔵へ暇さへあれは參詣を致しさて昇平
 の事なれば侍の出世は遅い殊も勤めも伊士立身を致さう手掛
 りがなぬなれども機ます愛宕へ參詣いづものやうに額堂に腰を
 掛け生温い接待茶をかぶく呑んで手刻との煙草をくゆらして
 居る晝の八ツ頃本殿普請よ付て大工左官爲の者十四五名の職人
 が煙草休み額堂へ腰を掛け勝手から持て来た茶菓子よ羨花思
 くの世間話一人上の編額を眺め○何だなア兄弟此の一番古
 郎だなア能く講釋で聞くぢやアねへか三馬術といつて具垣平九
 馬術だ此のなにあつちやア此の一番終いのは何てエのだ、十六才

亡者様ア見ヤがれ頼へ筋を出して怒つて居る。○汝等が然んな事
 をいつたつてさうなるものか盛岡に係り合でもあるぢやアある
 めへしまゝしやアがれ。○馬鹿をいへ他人の事でも頼み降らア
 咄の中よナヨソソ。と杓子木の音ソレ掛りだ。一同が出て行く
 跡隅にヨソヨソ。良助は始終の咄を聞て居たがアト見上げる故の
 頼面ウメ。是だ主家へ就ては功勞の尾崎何某の悴秀之助事當時相
 馬大作主家の爲に兎や角の噂はあれど誰一人此うして助勢を置
 さうといふべきものは未だ見聞かす心なき町人でも儀に依ては
 命を捨てる我が主家よは家來はなにかリ。亡者とは能く云つた
 天に口なし人を以て云はしむるとは茲か生涯無事よ送つても身
 分は八石四人扶持定業來たれば空しく死する是や此の人に助勢
 をしてせめて美名を死後に殘せ十年前よアノ事件で死刑になる
 か切腹なすか不思議に命も助かつて是まで居た是予君思然うぢ

外よごの位ゆ同類が上るんですね。○何がある者か此の人一人
 △「ウム那の屋敷なんざア古いのら大變の家來だらうがね。○夫
 アマア何千といふはさあるのよ。△其の何千の中此の人只た一
 人りかね。○然うサ。△夫やア分らねへ然んな事てエは無へ答だ乃
 公も講釋を聞てるけれど義士傳を見ねへな五万石の大名でせエ
 四十何人氣を揃へて高家の殿様を殺したといふぢやア無へか何
 十萬石といふ大々名何千人といふ家來の中で只た一人よ任して
 置き外の奴等アブレリノツペリして茫然して居やアがるのか然
 んな障の解らねへ奴があるものか乃公ちは叩き大工だお世話に
 なつた親方に然んな事でもある日よやア喚アや餓鬼を打捨ても
 手斧を堅よすげて飛出すぢやア無へか年々年中決持切米を賣つ
 て居て此ういふ時よ此の人にはかり任して置くなんつて夫ぢや
 ア大名家來は入らねへ盛岡の家來の奴等ア食いつぶしたがり」

昨日まで、歳暮を配つて商人、元日は休み、二日は初買、新らしい服、引腹掛、年玉物を荷の上へ山のやうに積上げ、眞一、御目出度う、座い、舊冬は有難う存じました、又た相變らず願い、升と大きな聲で、年玉物を配り、表門の方へ來ると御足輕が、足豆屋、一、待て、今、御登城、其方へ往ちや、成らん、眞一、左様で、御座いますか、足、今日、は、御装束、だ、拜んで、往け、眞一、是、ア、どうも、立派、で、げ、う、な、足、其方へ、往ち、ア、成らん、立、關、先、右、手、の、目、隠、し、荷、物、を、ッ、と、押、附、て、羽、目、板、の、間、か、ら、立、關、前、を、見、ると、對、の、御、道、具、御、差、箱、塗、物、は、横、附、か、道、具、持、持、は、麻、上、下、六、尺、は、白、丁、殿、の、か、出、で、を、待、つ、様、子、立、派、で、御、座、い、ま、す、な、ア、と、左、右、後、ろ、を、見、送、れ、ご、己、れ、を、注、目、な、す、の、な、し、天、の、與、へ、と、長、助、は、錢、箱、の、引、出、し、よ、り、ッ、と、出、した、は、高、崎、流、の、短、筒、首、物、の、前、の、息、出、し、の、上、よ、り、板、羽、目、の、間、を、興、物、の、屋、敷、の、邊、も

や、浪、人、致、し、固、よ、り、經、濟、は、確、か、な、人、ぢ、や、か、ら、儲、ら、の、貯、へ、は、あ、る、か、し、て、深、川、六、間、堀、へ、借、店、な、し、表、豆、商、人、大、き、な、聲、で、青、森、侯、の、お、長、屋、下、を、賣、歩、行、く、家、中、の、者、の、窓、か、ら、呼、び、求、め、て、見、れ、ば、非、常、に、安、い、屋、敷、者、は、始、末、些、か、な、事、も、争、さ、う、か、ら、大、聲、の、豆、屋、く、と、い、ふ、て、大、評、判、表、長、屋、の、衆、は、窓、か、ら、買、へ、る、が、中、長、屋、が、困、る、是、非、な、く、門、番、へ、頼、み、是、も、數、が、多、い、か、ら、門、番、も、迷、惑、自、分、等、も、買、て、見、れ、ば、馬、鹿、に、安、い、殊、に、表、豆、屋、の、出、入、は、な、し、す、る、か、ら、八、百、屋、の、空、鑑、札、の、あ、る、を、幸、い、且、屋、に、談、じ、て、些、か、の、金、で、鑑、札、を、下、げ、て、や、り、是、か、ら、出、入、の、商、人、部、屋、府、に、な、ど、で、は、大、層、に、可、愛、が、る、所、を、問、へ、ば、奥、州、一、の、關、十、年、前、に、出、白、い、話、を、す、る、朝、飯、は、腐、で、食、た、盡、敵、の、國、部、屋、夕、飯、の、何、處、で、と、い、ふ、や、う、に、彼、方、此、方、で、可、愛、が、ら、れ、十、分、青、森、家、へ、取、入、り、丁、度、三、年、目、大

此の貼札此方は島田の邸内隠れてありし大作の許へ彼の盛松
 が持参いたし先生は何ですエ探見れば此は如何に云々の文
 面勘左工門是は一体何だナア先生暫らく考へて居た大作「ア
 忝けな何を隠しませう御前私には何分此事願つて居りました
 御承知の如く私しは此の御輻をまたげぬ身の上、何千人の我が
 同藩誰かには我が精神を汲みて此の始末もあらうと心得し事
 せる哉此の壯士、實姓を隠し相馬大作とは忝けなし此の大作
 刑を受て先死ね残つた事は此の末のやる處まで買ぬく所存其
 の奮發は筆意に見えたるは最早や望みなし御用初めを相待て
 早速掛りへ自訴致さんと勢ひ込んだる相馬の決心島田主従支へ
 兼るは是れ尤も同月二十一日を待て大目附佐野筑後守の役邸へ
 自訴致し筑州の役柄なれば早々閣老御用番阿部備中守殿へ言

へ覗いを定むる御運の末とて青森殿四位の侍従の伊賀格よて
 花色の大紋へ上布伊長の襦袢を引上げ玄關式台より輿物へ移さん
 となす其時遅し彼時早し砲勢一發空を切り鼻下を射貫かれ何
 堪らん敷台を三尺ばかり飛上り仰向まごうと倒るッレ曲者とい
 ふ邸内の騒ぎ残り居るは豆屋の荷物ッレ怪しいと身許を調べ
 る六間堀の裏借屋出入になしたる門番の私し之ア丁度三度目な
 れば青森家の心配ハ大變四五日経つと市中の木戸へ貼札
 一今月二日青森侯上屋敷に於て御方土佐守殿を小銃にて
 討取り仕其處實証也該家より御病死なごの伊届有之候と
 是よて以上當主を討取ることも三度に相成いへば御役向よをい
 てお慶重の伊届へ相當の御所分有之等此段御披露仕し如斯
 月 日
 大公子御役人衆中様
 隠名無類の浪士相馬大作

方地制方役人國々へ出張と云ふ事東北大名各々喜ぶ就中青森前
 依頼仙台の家老公儀へ御奉公向にもなる事とて早速承知御普請
 東北を以てす園老方より伊達家の重役を密々か招ぎに相成り御
 の御遺言よ依て全園差出しの國持大名悉皆輸入れ尤も第一着に
 計是は神祖百細御條目に照し初代より何年の未は斯く計らへど
 談を青森へ言渡す譯にもならず榊原主計殿の御工風よて流言の
 足ならん其上罰してこそ然るべしとの意各々之に同意併し嚴
 の望みを貫かせよ、彼が望居るや主家舊領の榊山故主へ復さば
 律本人を助くる事は相成るまい彼ハ法に照して罰すべし又た此
 ぬ場合筑後殿より水府の館へ伺ひ御最負ではあるを法は法律ハ
 重役衆又々評議英蘭を致し裁判爲すに於ては兩家とも捨置かれ
 筑後守殿御立會は三奉行兩度のお調にて大作の才立は明了さて
 上是より閣下方協議の未愈い評定所よ於てお調へ掛りは佐野
 々々大守の變死はあり又た彼の我が領ならぬ榊山捨て置てハ心
 附さし重役を以て内々にて盛岡へ返附す是は盛岡も不満足は云
 はす無事に受取り前條腹せし事公儀へ聞へる是にて御細入れは
 沙汰止み之れ閣下方苦骨の策乃で再度大作を喚出し右の趣きを
 沙汰す大作は満涙を流して禮を上げ十日は経て死刑の
 一其方儀身分を不願貴顯へ對し再三の無禮利さへ御本丸大手
 際よて發砲致し段々公儀を恐れざる不埒の致し方重々不届
 付千住に於て死罪中附る者也
 但し生前の嘆願は聞届得さす事
 此の宣告を以て四十六才を一期に死罪二の舞をふまへたる關長
 助其死を嘆くも今は臣なし紋首の上其の首級を才受け郷里へ歸
 り厚く葬り今盛岡の榊山神社即ち是なり又た關長助屠腹致せ

方地制方役人國々へ出張と云ふ事東北大名各々喜ぶ就中青森前
 依頼仙台の家老公儀へ御奉公向にもなる事とて早速承知御普請
 東北を以てす園老方より伊達家の重役を密々か招ぎに相成り御
 の御遺言よ依て全園差出しの國持大名悉皆輸入れ尤も第一着に
 計是は神祖百細御條目に照し初代より何年の未は斯く計らへど
 談を青森へ言渡す譯にもならず榊原主計殿の御工風よて流言の
 足ならん其上罰してこそ然るべしとの意各々之に同意併し嚴
 の望みを貫かせよ、彼が望居るや主家舊領の榊山故主へ復さば
 律本人を助くる事は相成るまい彼ハ法に照して罰すべし又た此
 ぬ場合筑後殿より水府の館へ伺ひ御最負ではあるを法は法律ハ
 重役衆又々評議英蘭を致し裁判爲すに於ては兩家とも捨置かれ
 筑後守殿御立會は三奉行兩度のお調にて大作の才立は明了さて
 上是より閣下方協議の未愈い評定所よ於てお調へ掛りは佐野
 々々大守の變死はあり又た彼の我が領ならぬ榊山捨て置てハ心
 附さし重役を以て内々にて盛岡へ返附す是は盛岡も不満足は云
 はす無事に受取り前條腹せし事公儀へ聞へる是にて御細入れは
 沙汰止み之れ閣下方苦骨の策乃で再度大作を喚出し右の趣きを
 沙汰す大作は満涙を流して禮を上げ十日は経て死刑の
 一其方儀身分を不願貴顯へ對し再三の無禮利さへ御本丸大手
 際よて發砲致し段々公儀を恐れざる不埒の致し方重々不届
 付千住に於て死罪中附る者也
 但し生前の嘆願は聞届得さす事
 此の宣告を以て四十六才を一期に死罪二の舞をふまへたる關長
 助其死を嘆くも今は臣なし紋首の上其の首級を才受け郷里へ歸
 り厚く葬り今盛岡の榊山神社即ち是なり又た關長助屠腹致せ

しとも世に傳ふる島田勘左工門之を聞き兩人の塚を芝金地院に
 内へ建立す今尙關相馬の塚は金地院に遺れり施主は島田勘左
 工門相馬の忠魂祿是にて局を結ぶ目出度し

檜山麒麟之一擊下編終

全 明治廿六年五月三十一日 内務省許可
 年十二月二十日 印刷發行

一冊	定價金拾三錢
郵稅	金四錢

版權所有

大販賣所

編輯兼發行者 神田區南乘物町十五番地 鈴木源四郎
 印刷者 神田區南乘物町十五番地 小宮定吉
 發行所 神田區南乘物町十五番地 九阜館
 印刷所 神田區南乘物町十五番地 九阜館活版所

淺草區三好町 大川屋書店
 日本橋區本石町二丁目 上田屋書店
 日本橋區通四丁目 金櫻堂書店
 神田區裏神保町 文錦堂書店

